

石川県 金沢市

# 畝田・寺中遺跡XIV

—木曳野遺跡群XII—

平成 31 年 3 月  
(2019年)

金 沢 市  
(金沢市埋蔵文化財センター)



石川県 金沢市

# 畝田・寺中遺跡XIV

—木曳野遺跡群XII—

平成 31 年 3 月  
(2019年)

金 沢 市  
(金沢市埋蔵文化財センター)



## 例 言

1. 本書「畝田・寺中遺跡Ⅱ」は、石川県金沢市寺中町・畝田西4丁目・桂町地内に所在する事業名称木曳野遺跡群(寺中B遺跡、桂町南遺跡、畝田・寺中遺跡)の発掘調査報告のうち、平成16年度に実施した畝田・寺中遺跡の調査の一部について報告するものである。
2. 本調査は金沢市木曳野土地区画整理組合による土地区画整理事業に伴い、平成16年度に金沢市埋蔵文化財センターが発掘調査を実施したものである。
3. 本報告にかかる現地調査は金沢市埋蔵文化財調査委員会(当時：会長橋本澄夫氏、谷内尾晋司氏、垣田修司氏、横山方子氏)の指導の下で、庄田知充(文化財保護課主事；当時)が担当した。
4. 本書の執筆・編集は谷口宗治(文化財保護課担当課長補佐)が担当した。写真撮影は遺構を発掘調査担当者が行い、遺物を谷口明伸(文化財保護課主査)が行った。
5. 本書の各図及び写真図版の指示は以下のとおりである。
  - (1) 方位は全て磁北である。座標は世界測地系(第Ⅶ系)に基づき設定している。
  - (2) 各図の縮尺は、遺物は1/3、遺構は1/40が主であるが、各図に指示しているとおりである。
  - (3) 遺物実測図の番号は通し番号とし、本文中、観察表、写真図版のそれと一致する。
  - (4) 遺構名の略号は、SD=溝・川跡、P=ピットなどである。
  - (5) 土器については「壺」・「甕」・「高杯」・「器台」などと表記するが、用途を示すのではなく、形態による分類で「壺形土器」などの略称である。
6. 本書に収録した遺物、現場図面、測量図葉、写真台帳等はすべて金沢市埋蔵文化財センター及び金沢市埋蔵文化財取蔵庫で一括して保管している。

## 畝田・寺中遺跡XIV 目次

第1章 調査箇所と内容の報告	1
第1節 調査箇所と既往の報告内容	
第2節 本書の報告について	
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 検出遺構と遺物	5
第1節 調査区の概要	
第2節 建物遺構と出土遺物	
第3節 井戸・土坑と出土遺物	
第4節 溝と出土遺物	
第4章 自然化学分析	40
木曳野遺跡群から出土した木製品の樹種	
第5章 総括	41
第1節 畝田・寺中遺跡の時期別の様相について	

写真図版

# 第1章 調査箇所と内容の報告

## 第1節 調査箇所と既往の報告内容

今回報告する畝田・寺中遺跡の発掘調査は、金沢市木曳野土地区画整理事業に伴い実施されたもので、事業全体では平成14年度から平成16年度にかけて、約13,760㎡の発掘調査が行われている。遺跡の発見から発掘調査へ至るまでの詳細な経緯は既刊「木曳野遺跡群Ⅰ」を参照願いたい(金沢市2006)。

本事業による調査箇所は第1図のとおりである。調査時には、補助事業主体の名称として泉費分A～C区、道路名称によって主幹線1～5区、支線部などと呼称して調査を実施している。既刊報告書の報告内容との対応については第1表および第1図のとおりである。

木曳野遺跡群Ⅰ(以下Ⅰ、Ⅱ等とする)では、調査に至る経緯や縮尺1/300、1/100の遺構平面図版と共に植生や環境復元、木材・石材利用の把握のための自然科学分析結果を掲載している。

Ⅱでは、寺中B遺跡と畝田・寺中遺跡内の柱・寺中遺跡として調査を実施した箇所の調査成果を掲載している。

Ⅲでは、桂町南遺跡と畝田・寺中遺跡の泉費分A～C区の調査成果を掲載している。また、畝田・寺中遺跡の柱・寺中遺跡部分を除いた、縮尺1/500の畝田・寺中遺跡図が別紙で用意されている。

Ⅳでは、畝田・寺中遺跡の主幹線1区と2区のSD222、SD303(大河跡)の調査成果を掲載している。

Ⅴでは、畝田・寺中遺跡の主幹線3区と調査成果と1区SD222、包含層、2区P20、SD222、SD240、SD244、SD303、4区大河跡出土の墨書土器を掲載している。

Ⅵでは、畝田・寺中遺跡の主幹線2区における遺構及び土器・陶磁器、石製品について報告している。

Ⅶでは、畝田・寺中遺跡の主幹線4区の遺構及び遺物、及び既に報告済みの調査区の出土遺物で掲載漏れのあった遺物について補遺として報告している。

Ⅷでは、畝田・寺中遺跡の主幹線4区の遺構及び遺物を掲載している。

Ⅸでは、主幹線5区の遺構及び遺物を掲載している。

Xでは、東工区南北線の遺構及び遺物を掲載している。

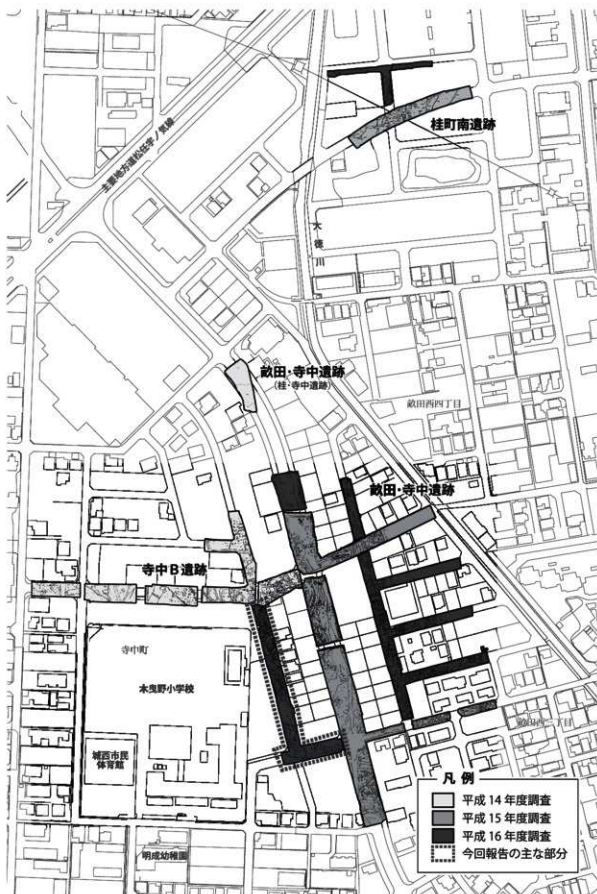
XIでは、東工区東西線の遺構及び遺物を掲載している。

## 第2節 本書の報告について

本書は西工区とした街区道路についての報告である。

第1表 報告書の内容

記号No.	書名	内容	発行年
231	木曳野遺跡群Ⅰ 寺中B遺跡Ⅱ 桂町南遺跡Ⅰ 畝田・寺中遺跡Ⅱ	調査に至る経緯、経通、航空測量、自然科学分析	2006
239	木曳野遺跡群Ⅱ 寺中B遺跡Ⅲ 畝田・寺中遺跡Ⅲ	寺中B遺跡(報告完)柱・寺中(畝田・寺中)遺跡	2007
249	木曳野遺跡群Ⅲ 桂町南遺跡Ⅱ 畝田・寺中遺跡Ⅳ	桂町南遺跡(報告完)畝田・寺中遺跡(泉費A・B・C区)	2008
259	木曳野遺跡群Ⅳ 畝田・寺中遺跡Ⅴ	畝田・寺中遺跡(主幹線1区・2区SD222、SD303)	2010
279	木曳野遺跡群Ⅴ 畝田・寺中遺跡Ⅵ	畝田・寺中遺跡(主幹線3区・2区墨書土器[1区・4区含])	2012
288	木曳野遺跡群Ⅵ 畝田・寺中遺跡Ⅶ	畝田・寺中遺跡(主幹線2区・土器・陶磁器・石製品)	2013
293	木曳野遺跡群Ⅶ 畝田・寺中遺跡Ⅷ	畝田・寺中遺跡(主幹線4区・主幹線2区木製品・金属製品)	2014
299	木曳野遺跡群Ⅷ 畝田・寺中遺跡Ⅷ	畝田・寺中遺跡(主幹線4区支線部、自然科学分析)	2015
304	木曳野遺跡群Ⅷ 畝田・寺中遺跡Ⅷ	畝田・寺中遺跡(主幹線Ⅴ区)	2016
307	木曳野遺跡群Ⅷ 畝田・寺中遺跡Ⅷ	畝田・寺中遺跡(東工区南北線)	2017
315	木曳野遺跡群Ⅷ 畝田・寺中遺跡Ⅷ	畝田・寺中遺跡(東工区東西線)	2018
322	木曳野遺跡群Ⅷ 畝田・寺中遺跡Ⅷ	畝田・寺中遺跡(西工区)、自然科学分析	2019



第1図 調査区位置図 (S=1/30,000)



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

畝田・寺中遺跡は石川県金沢市畝田町、寺中町地内に所在する。

石川県は日本海に突き出た能登地方とその南の加賀地方に分けられ、金沢市は加賀地方の北部に位置しているが、その西部は日本海に接し、南東部には海拔1,500mを超える山地をかかえる。この山地からは、市域を西流浅野川と犀川が流れ、両河川に挟まれた地域に市街地が形成されている。また、犀川を境として、北部平野と南部平野に分かれ、前者は犀川・浅野川やその北部を流れる金腐川・森下川によって形成された沖積平野であり、後者は手取川が形成する扇状地の北辺である。

本遺跡は市内の北西部、現在の海岸線からは約2km内陸部に位置しており、周辺は海岸線に沿って南北に延びる内灘砂丘の後背湿地を形成している。また、南側を西流する犀川からの分流が本地域を北流し、北側を西流する大野川へと流れ込むことから、ますます湿潤な環境を形成している。



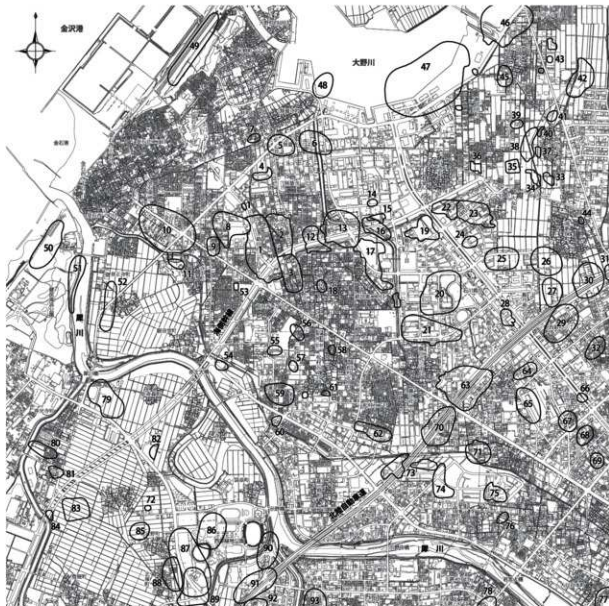
第2図 石川県と金沢市の位置

### 第2節 歴史的環境

畝田・寺中遺跡の周辺に分布する遺跡を時代毎に概観すると、縄文時代には後期中葉と晩期後葉の松村A遺跡(59)や晩期の土器・石器が出土する本遺跡があり、近岡遺跡(46)では昭和45年の調査で花粉分析から縄文晩期の農耕について話題になった。弥生時代は戸水C遺跡(20)、戸水C遺跡(47)、藤江C遺跡(21)などで前期からの遺物が確認されており、畝田C遺跡(13)などで遠賀川式土器が出土しているが、中期以降増加する傾向にあり、西念・南新保遺跡(29)のような後期へ繋がる拠点集落も出現する。本遺跡においては、中期から遺物が確認されている。古墳時代は弥生終末期の遺跡が継続されることが多いが、中・後期になると激減し、本遺跡の他、周辺では藤江B遺跡(63)で確認できる。当該期の須恵器を多く確認している本遺跡や藤江C遺跡などが中・後期の拠点集落になる可能性があり、本遺跡に関しては弥生時代終末から7世紀まで継続して確認できる稀有な遺跡である。

奈良・平安時代は再び遺跡が広く分布し、犀川や大野川河口周辺に津波関連遺跡や官衙・荘園関連遺跡が出現する。本遺跡においても8世紀前半から中頃の大規模集落が確認され、遺構の規模や「津司」墨書土器から金石本町遺跡と一連の港湾関連遺跡と考えられている。また、石川県調査区から遺跡海便が帰国した「天平二年(730)」の記年銘墨書土器が出土しており、その際の響に使用された可能性が指摘されている。また、近隣の畝田ナベタ遺跡(17)からは大陸産とされる青銅金箔製の帯金具(巡方)が出土しており、具体的な大陸との交流を物語る遺跡群といえる。鎌倉・室町時代は、本遺跡も含めて当該期の遺跡が広く分布している。本遺跡では、堀で囲繞された方2町×1町半程度の空間が検出されている。南新保北遺跡(44)では銭の出納に関わる付札木簡が出土している。戸水C遺跡は古代以来の津波関連遺跡として評価されている。

本遺跡は、大野荘を含む大野荘内(一時期は富永御厨内か)に所在する。畝田地名の初見は日本書紀「大野郷畝田村」であり(1998)、平安時代にはその名が認められる。中世には「宇瀬田村」、「宇根田村」、「宇祢田村」、「うね田村」などとみえる。



- |                   |                      |                     |
|-------------------|----------------------|---------------------|
| 1 駅前・寺中遺跡 (弥生~中世) | 32 西生原遺跡 (弥生)        | 63 藤江島遺跡 (弥生~平安)    |
| 2 新田遺跡 (縄文~平安)    | 33 東江ノソノ遺跡 (縄文~室町)   | 64 二ツ丁ノ遺跡 (弥生~古墳)   |
| 3 新田大塚ノ遺跡 (縄文~室町) | 34 大友ノ遺跡 (弥生~平安)     | 65 二ツ丁ノA遺跡 (弥生~古墳)  |
| 4 新田遺跡 (弥生~中世)    | 35 大友A遺跡 (弥生~平安)     | 66 西生原ノ少遺跡 (弥生~古墳)  |
| 5 新田遺跡 (古墳)       | 36 大友D遺跡 (弥生~平安)     | 67 西生原ノ遺跡 (縄文~古墳)   |
| 6 新田遺跡 (古墳~中世)    | 37 新田二ノ遺跡 (古墳~室町)    | 68 二ツ丁ノ式遺跡 (弥生~古墳)  |
| 7 寺中遺跡 (縄文~平安)    | 38 大友E遺跡 (弥生~室町)     | 69 藤江A遺跡 (弥生~平安)    |
| 8 寺中遺跡 (弥生~平安)    | 39 近所カンタン遺跡 (弥生~平安)  | 70 藤江B遺跡 (弥生~平安)    |
| 9 寺中遺跡 (弥生~平安)    | 40 近所西遺跡 (縄文~古墳)     | 71 寺中遺跡 (不詳)        |
| 10 寺中遺跡 (江戸)      | 41 近所中遺跡 (縄文~室町)     | 72 近所新遺跡 (弥生~平安)    |
| 11 寺中遺跡 (江戸)      | 42 近所北遺跡 (縄文~平安)     | 73 近所中世遺跡 (弥生~平安)   |
| 12 新田遺跡 (弥生~平安)   | 43 近所ツラ遺跡 (弥生~平安~室町) | 74 近所しんさい遺跡 (古墳~室町) |
| 13 新田遺跡 (弥生~平安)   | 44 新田北遺跡 (古墳~中世)     | 75 新田遺跡 (弥生~平安)     |
| 14 新田遺跡 (弥生~平安)   | 45 近所カンタン遺跡 (弥生~平安)  | 76 近所遺跡 (室町)        |
| 15 新田遺跡 (弥生~平安)   | 46 近所遺跡 (縄文~室町)      | 77 近所遺跡 (弥生~古墳)     |
| 16 新田遺跡 (弥生~平安)   | 47 近所遺跡 (弥生~平安)      | 78 近所遺跡 (弥生~平安)     |
| 17 新田遺跡 (弥生~平安)   | 48 新田寺中遺跡 (縄文~古墳)    | 79 近所遺跡 (弥生~平安~江戸)  |
| 18 新田遺跡 (不詳)      | 49 新田遺跡 (不詳)         | 80 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |
| 19 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 50 新田寺中遺跡 (縄文~弥生~平安) | 81 寺中世の跡遺跡 (古墳~平安)  |
| 20 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 51 新田寺中遺跡 (弥生~平安)    | 82 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |
| 21 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 52 新田寺中遺跡 (古墳~室町)    | 83 寺中世の跡遺跡 (弥生~古墳)  |
| 22 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 53 寺中世の跡遺跡 (古墳)      | 84 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |
| 23 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 54 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)   | 85 寺中世の跡遺跡 (弥生~古墳)  |
| 24 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 55 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)   | 86 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |
| 25 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 56 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)   | 87 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |
| 26 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 57 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)   | 88 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |
| 27 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 58 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)   | 89 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |
| 28 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 59 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)   | 90 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |
| 29 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 60 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)   | 91 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |
| 30 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 61 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)   | 92 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |
| 31 戸水西遺跡 (弥生~平安)  | 62 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)   | 93 寺中世の跡遺跡 (弥生~平安)  |

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (S=1/30,000)

## 第3章 検出遺構と遺物

### 第1節 調査区の概要

西工区概要：平成16年度の調査は前年度までに実施した主幹線2区から5区の西側30mの地点を併走する区画道路予定地について実施したものである。同年度には東工区も実施しており、区分するため西側の地点については西工区とした。西工区は主幹線に接続し、東西方向に展開する部分と、これに直行し南北に展開する道路で構成される。それぞれの遺構の位置については東西にアルファベットを付し、南北に数字を付けて表す10m四方を単位とするグリッド番号を用いた。

### 第2節 建物遺構と出土遺物

建物の報告は、先に刊行した報告書中の分類を踏襲する。柱穴の並びが方形、或いは長方形に配置される建物跡を掘立柱建物として報告する。平地式建物跡、側柱建物と総柱建物とに区分できる。今次報告では7棟について報告する。

**SB301(図版5)** T15-U14にて検出。SD319を外周溝、SD320を内周溝とする平地式建物跡である。柱穴としてSP309とSP310が確認できる。1間×1間の建物跡で、SK307をSD320の続きとみると、南側に入出入口のある建物跡となる。SP309とSP310の間隔は2.8mを測る。方位は磁北より11°東に振る。SB305・SB307とあわせ、平地式建物が展開する区域にあるものとみられる。弥生時代終末から古墳時代前半頃の建物跡とみられる。

**SB302(図版6)** T16-T15にて検出。東西にSP358・SP322・SP323の2間3.8m、南北にSP358・SP321・SP327の2間3.5mを測る正倉型総柱建物跡だが、P334を北列に含めると東にさらに伸びる総柱建物跡とみられる。方位は磁北より61°東に振る。柱穴は略円形を呈し、直径にばらつきがある。

**SB303(図版5)** T16にて検出。柱列を溝状に掘り込む布掘建物跡である。南北に1間2.8m、東西に4.2mを測る。SB304・SB506と切りあう。南側の柱列は東西の端で柱穴上に落ち込むが、深さ0.25mの溝状で検出した。北側の柱列は東のSP347-1・SP347-2からSP348、SP349と並ぶ2間で3本の柱を有し、幅0.5mの溝状を呈する。SP348とSP349の断面で柱痕跡と推測される縦に層される土色を確認した。方位は磁北より85°西に振る。弥生時代後期に属する倉庫型建物とみられる。

**SB304(図版7)** S16-T16にて検出。南北にSP345・SP330の1間3.8m、東西にSP351・SP344・SP345の2間4.6mを測る側柱建物跡である。柱穴の掘方は略円形を呈し、深さ0.4mと深い。方位は磁北より68°西に振る。

**SB505(図版6)** S17-T17にて検出。南北にSP387・SP386・SP385・SP378の3間3.8m、東西にSP387・SP389・穴の2間3mを測る正倉型側柱建物跡である。SD327で囲む区画に配した建物跡か。方位は磁北より27°東に振る。

**SB506(図版6)** S16-T16にて検出。南北にSP343・SP341・SP339の2間3.3m、東西にSP326・SP330・SP339の2間3.5mを測る正倉型総柱建物跡である。柱穴の掘方は略円形を呈し、深さ0.5mと深い。方位は磁北より41°西に振る。

**SB507(図版5)** T17-T16にて検出。南北にSP377・SP366の1間2.9m、東西にSP377・SP381・SP382の2間4.5mを測る側柱建物跡である。柱穴の掘方は略円形を呈し、深さ0.3mを測る。方位は磁北より40°東に振る。

### 第3節 井戸・土坑と出土遺物

SE301(第8図) X7にて検出。東西に長いやや歪んだ楕円形を呈する。東にSD302が隣接する。掘方は長軸2.3m、短軸1.7m、深さ0.7mを測り、逆台形を呈し中央に井戸枠が残る。井戸は長軸に0.9mを測る種状に縦り抜いた木材を縦に2本対面に配し、長楕円形の井戸枠とする。井戸枠下より井戸底に用いた横に敷いた板材の一部が残欠する。井戸枠の内外で堆積土砂に差異があり、逆台形の掘方内に差して築造したもののか、枠内の体積土砂中には炭化物の混入が認められる。古墳時代前期の壺(1・2)と和泉陶器窯の編年(以下、編年記号を用いる)での古墳時代TK47~MT15型式の灯蓋(4・5)杯身(6)、古代Ⅳ期の杯身(8)が出土している。

SK304・SK305・SK306(第8図) U12にて検出。それぞれ略長方形を呈し、類似した土坑である。掘方の周囲が溝状に一段落ち込み、中央はやや高い。SD311の軸に合わせ3基が連なり、それぞれの間隔は1mを測る。上面形態は隅丸方形を呈する掘立柱建物の柱穴に類似するが深さはそれぞれ0.1m内外と極めて浅い。

SK308(第8図) T14にて検出。略円形を呈する。西にSD317が位置する。SK312と一部切り合う。長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.9mを測る。掘方は円筒形を呈し、素掘りの井戸か。覆土は粘土と粘性土による水平体積により概ね3層を形成する。古墳時代中期の甕(9)、古代Ⅳ期の杯身(11)や磨製石斧(12)などが出土している。

SK315 T15にて検出。SD323の北に位置していたが、調査の進捗により滅した。SD323の延伸部分か。古墳時代前期の高坪脚部(13)が出土している。

SK317 S18・T18にて検出。東西に長い長楕円形を呈する。東に溝状に伸び、SD329に接続する。長軸4.5m、短軸2.2m、深さ0.15mを測り、掘方は浅い皿形を呈する。古墳時代前期の有段掘凹線竈口縁(15)や内外面を赤彩した蓋(14)が出土している。

SK320(第8図) S18にて検出。南北に長い歪んだ長楕円形を呈する。長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.1mを測り、掘方は浅い椀形を呈する。概ね2層にされるが、北側に柱穴上の落ち込みが観察され、布留系の甕(17)など古墳時代前期の遺物が出土している。

SX301(第7図) W6・W7にて検出。南北に長い長楕円形を呈し、南へさらに伸びている。南北に8m、東西に6m、深さ0.8mを測る。複数の小規模な土坑が切りあう。胴部外面に右斜めの斜条痕を施すものは縄文晩期の粗製深鉢(22)で、断面で輪積痕が確認できるものは古墳時代の壺の口縁部(21)である。

### 第4節 溝と出土遺物

SD301(第7図) Y7にて検出。南北に展開するとみられるが、不定形な形を呈し、北側でSD303と切りあう。幅7.5m、深さ0.3mを測る。

SD302(第7図) X6・X7にて検出。SD301の西に位置する。南北に展開するとみられ、北側でSD303と切りあう。幅8m、深さ0.5mを測る。主幹線2区で検出したSD240と同一の溝か。古墳時代前期から中期の上師器(23~39)と古墳時代の須恵器(40~41)古代の須恵器(42~44)と出土しているが、主体は前者であろう。24の壺・25の甕は外面にへら削り調整が確認でき、小型土器(34~38)は祭祀関連のものか。

SD303 Y7・Z7にて検出。東西に展開する溝で主幹線の大川跡が湾曲し大きく幅がある地点か。北壁でおよそ21mにわたり広がりSD301・302と切りあう。深さ0.4mを測る。古代Ⅲ~Ⅳ期の須恵器(45・46)や珠洲焼(48)が出土している。

SD304(第6図) U6・V6にて検出。東西に展開、幅1.5m、深さ0.2mを測る。49と50は同一物とみられる古墳時代前期の内外面を磨く壺、51は古代の横瓶の端部か。

SD305 U8・V8にて検出。東西に10mで直角に曲がり、南北に9mにわたり展開し、北にSD306が並行する。最大幅0.8m、深さ0.1mを測る。建物跡の区画溝か。

SD306 U9・V9にて検出。SD304と同じ軸を有する。幅2m、深さは掘方に段差があり、深い部分で0.3mを測る。古代Ⅳ期の坏身(52・53)が出土している。

SD307 V9・V10にて検出。東壁より北西方向へ展開し、SD308と並行する。幅0.9m、深さ0.2mを測る。TK43型式の坏蓋には溶着した破片が認められる。

SD308 T12・U12・U11・V10にて検出。南東より北西へ展開し、SD311やSD314・SD317と並行する。幅2～2.5m、深さ0.5mを測る。集落の周溝の類か。古墳時代前期から中期にかけての土師器と須恵器、古代Ⅳ期に属する須恵器などが出土している。弥生時代終末の有段椀線甕(60)が月形式期と最古相を示し、布留系のくの字甕(62～66・68)、山陰系の二重口線甕(71・72)がこれに続くもので量比的には古墳時代前期が主を占める。77は把手状の裝飾を持つ無頸壺で、高坏・器台(89～97)はやや古相を示すものが多い。須恵器では大型の甕(101)、甕成いは長頸壺とみられる頸部(102～104)のほか、TK23～TK43型式の坏身坏蓋が出土し、TK23が112、TK47が105・113～116、MT15が109～111、TK43が107となる。126は古代Ⅳ期の横瓶で一方の端部にカキ目が残る。124は高松産の鉢で金属器を模したものだ。127は穿孔を施す角杯の先端部で、志賀町中村畑遺跡B地区上層出土品中に類例がある。SD310 U11・U12にて検出。SD308とSD311の間に位置する。南北方向に広がる溝で、SD308よりの派生とみられ、北で地山と同化する。最大幅2.6m、深さ0.1mを測る。古墳時代の臈胴部(132)と古代Ⅳ期の坏身(133)が出土している。

SD311(第6図) U12にて検出。SD313と切りあい、SK304～SK306はこの溝に沿う。南東より北西に展開し、SD314に合流する。幅0.8m、深さ0.2mを測る。古墳時代前半の内外面ハケ調整のくの字甕(134)、有段口線甕(135)外面を赤彩した短頸壺(136)があり、須恵器では140の坏身かMT15、138のTK43型式が出土している。

SD313 U11・U12にて検出。東西に展開し、SD310・SD311と切りあう。幅0.8m、深さ0.2mを測る。Ⅲ期～Ⅳ期の須恵器坏底部(141)が出土している。

SD314(第6図) T13・U13・U12にて検出。南東から北西に流れる溝で、SD308とSD317に挟まれる。西で大きく広がり、最大幅2m、深さは0.5mを平均とし、最深部で0.7mを測る。内面を黒色処理した土師器碗(142)などが出土している。

SD317(第7図) 西T14・V13にて検出。SD314とはほぼ並行する。幅は4～5m、調査区の中央部が最も深く、0.8mを測る。溝の最下層に多く遺物を含む。生時代終末から古墳時代中期にかけの土師器が出土している。甕類(152～164)は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての有段椀線甕(152～155)とこれに付随する有段甕(156)、山陰系の頸部に凸帯を巡らす大型の甕(157～159)、布留系のくの字甕(162～164)、口唇部に面取りを持たぬくの字甕(160・161)などこの時期の甕の内容を看取できる。壺類では口縁部に裝飾を施す166は東海系のハレス壺で、172は口縁部に縦の貼付凸帯を2本貼る。外面を赤彩した加飾壺類では大型の二重口線甕(174)のほか、直口壺(176)、有段壺(177)、無頸壺(180)などがある。高坏・器台は内外面に赤彩を施す器台(201)と受部に類滴状の透かしを施す裝飾器台(203・204)が月形式期と古相を示し、受け部が碗状を呈する高坏(206)がこれに続き、内面を黒色処理する古墳時代中期のもの(207)は台付碗の様相を呈す。小型器台(215～217・219)では三方透が主となる。壺類に供されていた蓋(188・189)のほか、小型土器類(182～185)など内容は多岐に及ぶ。石器では鉾

石(196・197)、打製石斧(198・226)、砥石(199・200)、玉類の加工過程と推される石核(225)、破断した磨製石斧を礫石へ転用したもの(227)などがある。石材表面に細い線痕がつくもの(228)は金属製品の刃部等を研磨する際についたものか。須恵器では古墳時代(229～243)と古代(246～249)が出土し、TK47(233・235)、MT15(229・230・232・234)TK43(236・237)TK43～TK209(231)型式に区分される。238～241もTK47～TK43に属す壺類で、238は壺とみられ、胴部に穿孔を有し板状工具で連続刺突を巡らせる。239の壺は口縁部に波状文、胴部に連続刺突文を巡らせ、240は胴部に条痕文を施す。246～248は古代Ⅳ期の坏身類である。

**SD318** V13にて検出。SD317に並走する小規模な溝である。U13付近でSD317と合流。SD317の北岸にみられる平坦部として伸びる。東壁付近で最大幅1.5m、深さは0.4mを平均とするが、深い地点では0.8mを測る。弥生時代後半から古墳時代前期の土師器(250～257)が出土している。口縁部が受口状を呈し底部は平底である甕(250)は弥生時代後期から終末期にかけての過渡期にあるもので、ほかは古墳時代前半(251～256)である。

**SD319** T14・T15にて検出。平地式建物SB301の外周溝である。幅0.4m、深さ0.1mを測る。内面を黒色処理した土師器椀(148)が出土している。

**SD320** V14にて検出。SK307として調査したもので、事後平地式建物SB301の内周溝であるSD320の東への延伸部と判断した。

**SD322** T15にて検出。SD317・SK308方向より北西にかけ広く落ち込む。平地式建物SB301の外周溝SD319に隣接し、SD317の北に位置する。SB301隣接地点で幅1.5m、深さ0.05mを測り、北西で大きく広がる。胴部下半分にロクロでケズリ調整を施す長頸壺(259)、MT15(261)、TK10(262)、TK43(263～265)の坏身蓋のほか、同時期に属する有台坏(267)、古代Ⅳ期の坏身(268・269)、長頸壺(260)がある。

**SD323** T15にて検出。SD322とSD319と切りあい、幅0.9m、深さ0.1mを測る。古代の高坏脚部(149)が出土している。

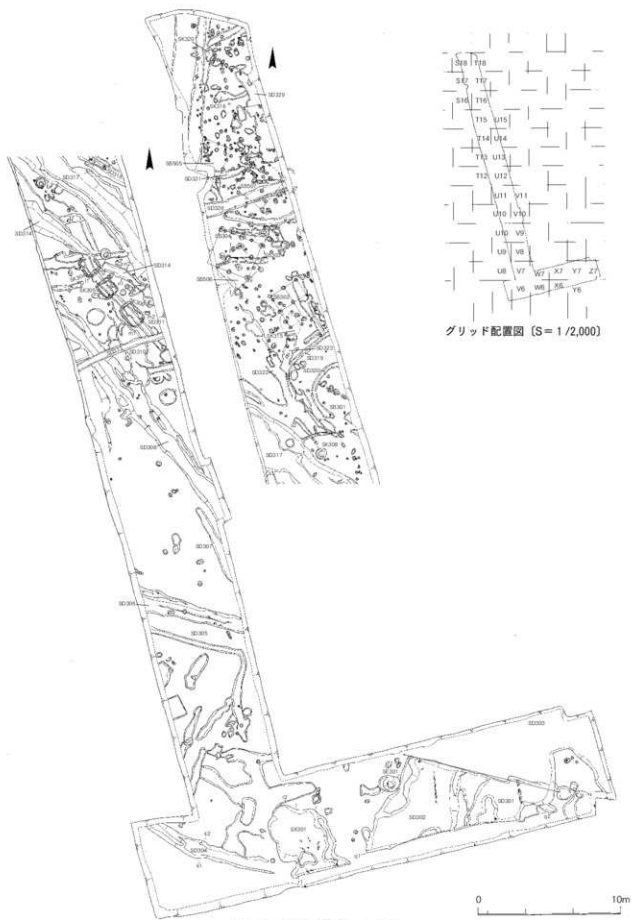
**SD327** T16にて検出。SB303の北に位置する。南に円弧を描き、西はSD328付近で途切れる。幅0.7m、深さ0.5mを測り、覆土は概ね3層に区分される。

**SD328(第8図)** S16・T17にて検出。東西に流れる溝である。幅1.5m、深さ0.3mを測る。覆土は概ね4層に区分される。古墳時代初頭の二重口縁の壺(150)が出土している。

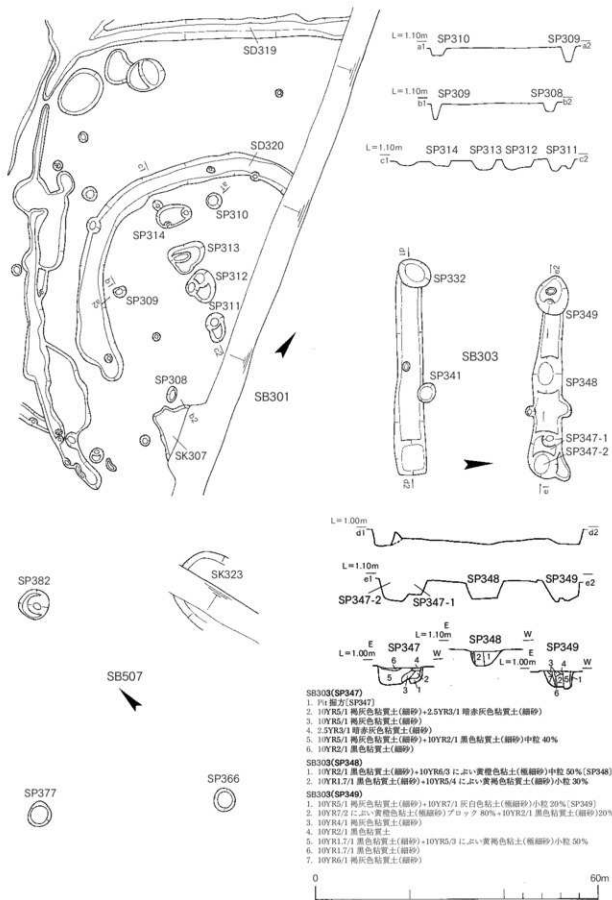
**SD329(第8図)** T17・T18にて検出。東側が調査区外で、幅1.5mを超え、深さ0.1m未満の浅い落ち込みを呈する。土錘(151)が出土している。

**SD331(第8図)** S17・T17にて検出。SB505と切りあう。南に円弧を描く短い溝で幅0.7m、深さ0.2mを測る。SD327と併せ平地式建物の周溝の一部か。

**包含層** 口縁部を大きく外販させる古墳時代の甕(56)、古墳時代の大型の須恵器壺(57)、13世紀の龍泉窯系白磁碗(58)、袋文字「大」を記した須恵器坏身(59)などがある。

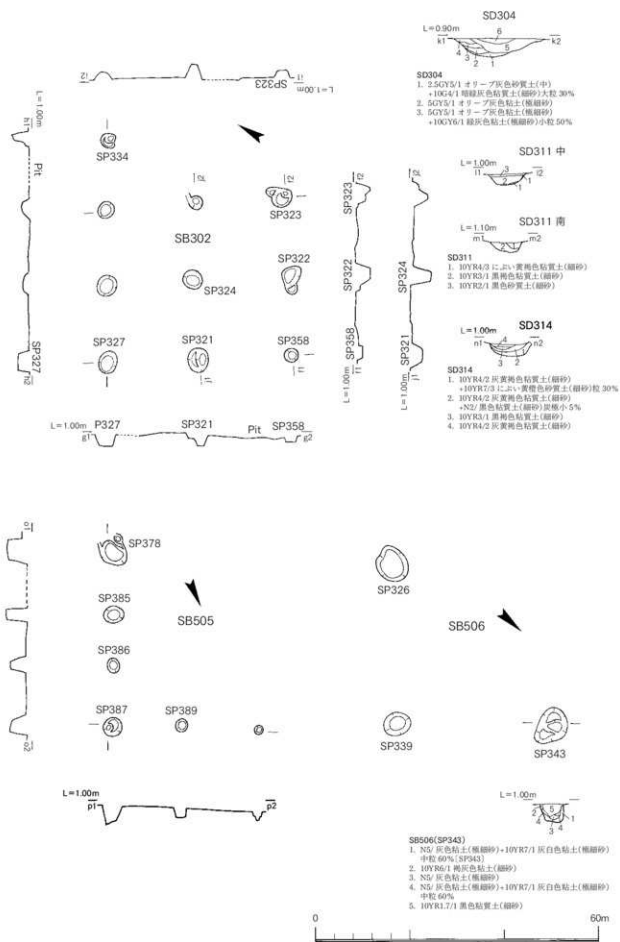


第4図 遺構全体図 (S=1/250)

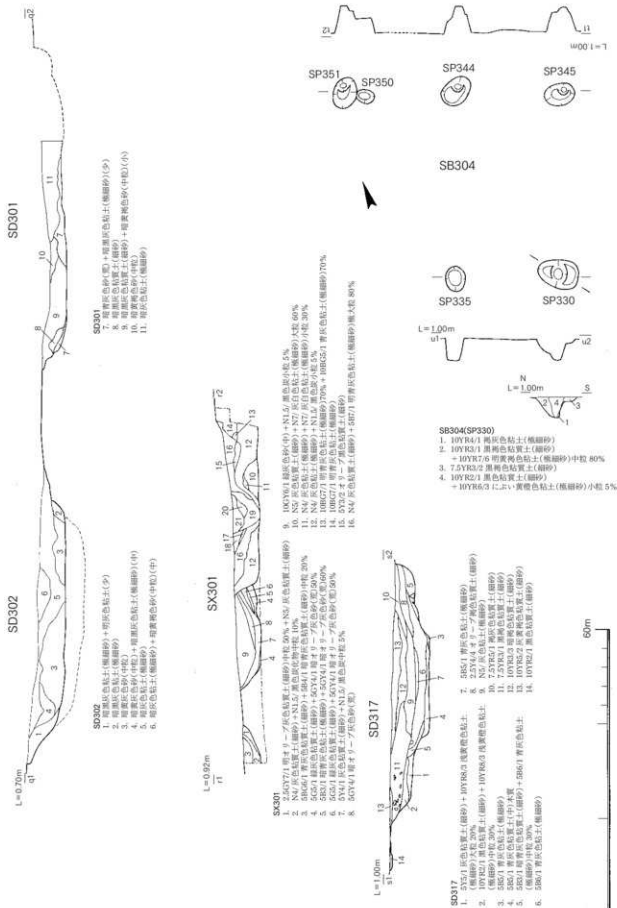


第5図 SB301・SD301・303・507遺構図 (S = 1/80)

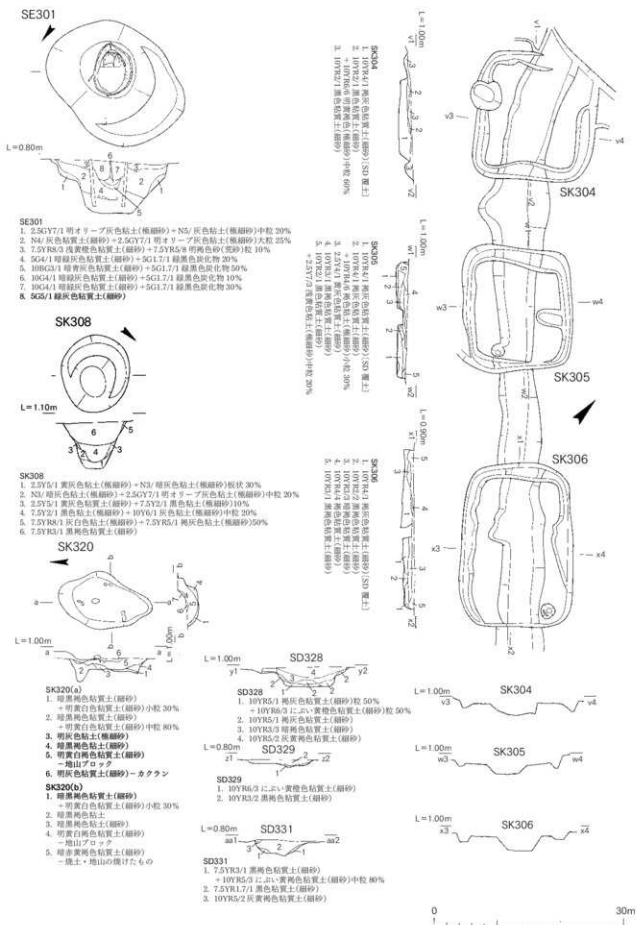




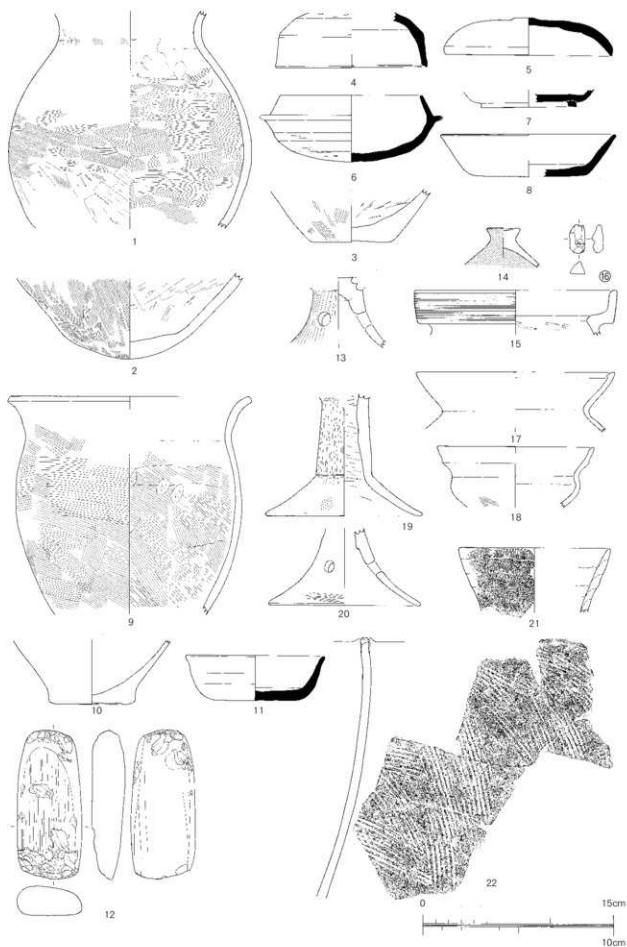
第 6 図 SB302・505・506遺構図 (S=1/80)



第 7 圖 SB304・SD301・302・317・SX301遺構圖 (S = 1/80)



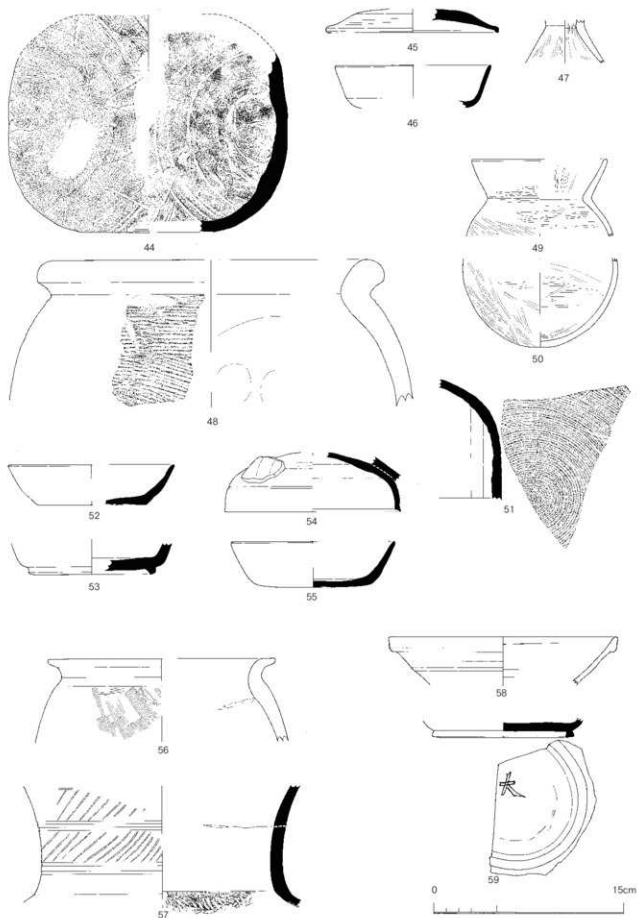
第 8 図 SE301・SK304・305・306・308・320・SD328・329・331遺構図 [S=1/60]



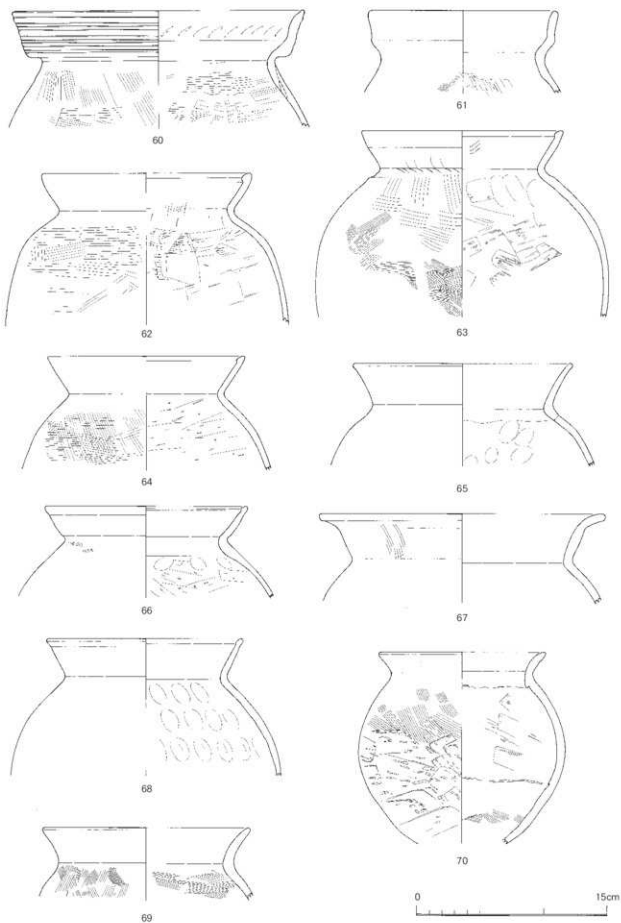
第9図 SK308・315・317・320・SE301・SX301 出土遺物 [S=1/2・1/3丸数字]



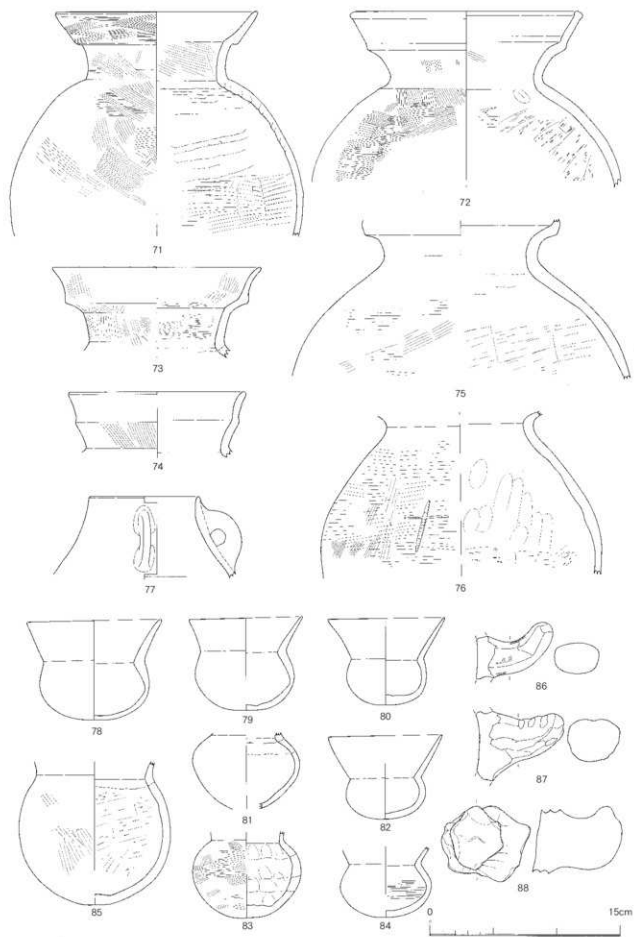
第10圖 SD302 出土遺物 (S= 1 / 3)



第11圖 SD302・303・304・306・307・包含層 出土遺物【S=1/3】

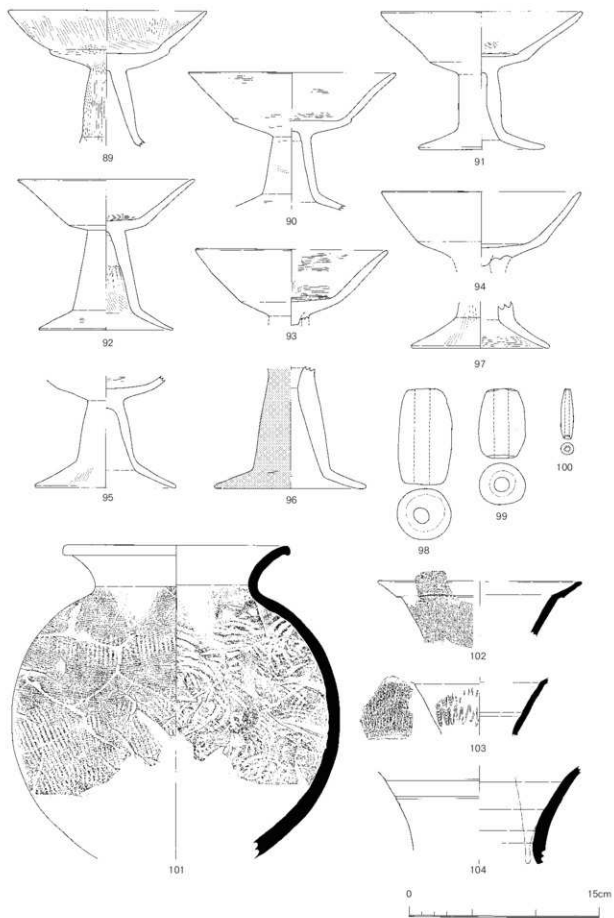


第12図 SD308 出土遺物 (S=1/3)

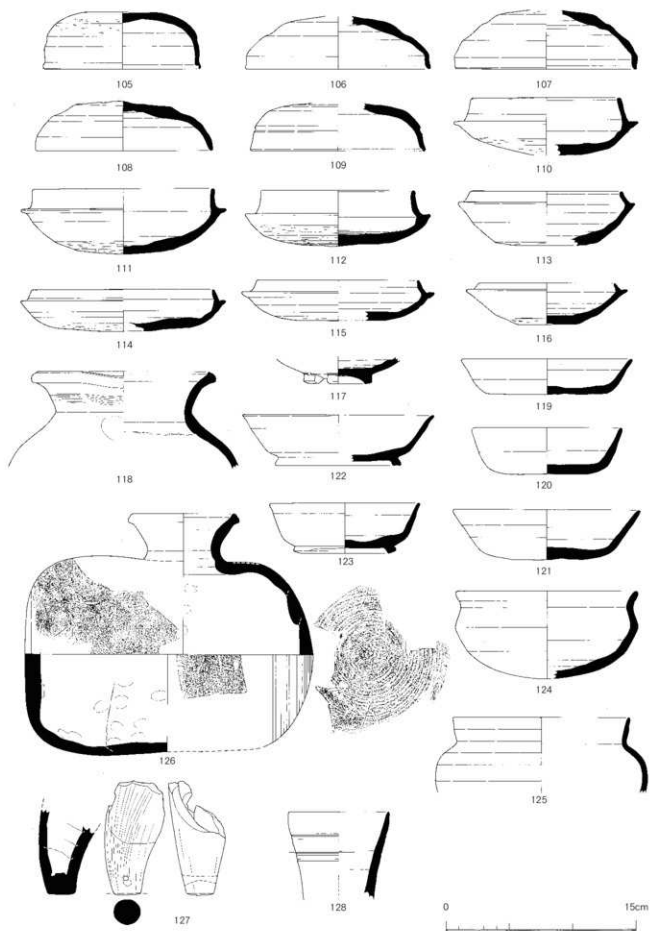


第13図 SD308 出土遺物 (S=1/3)

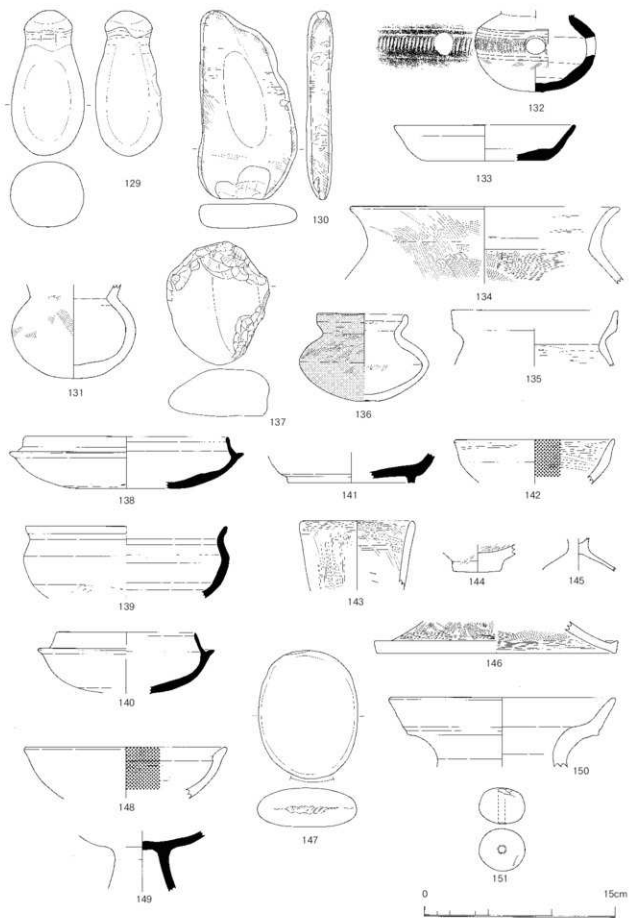




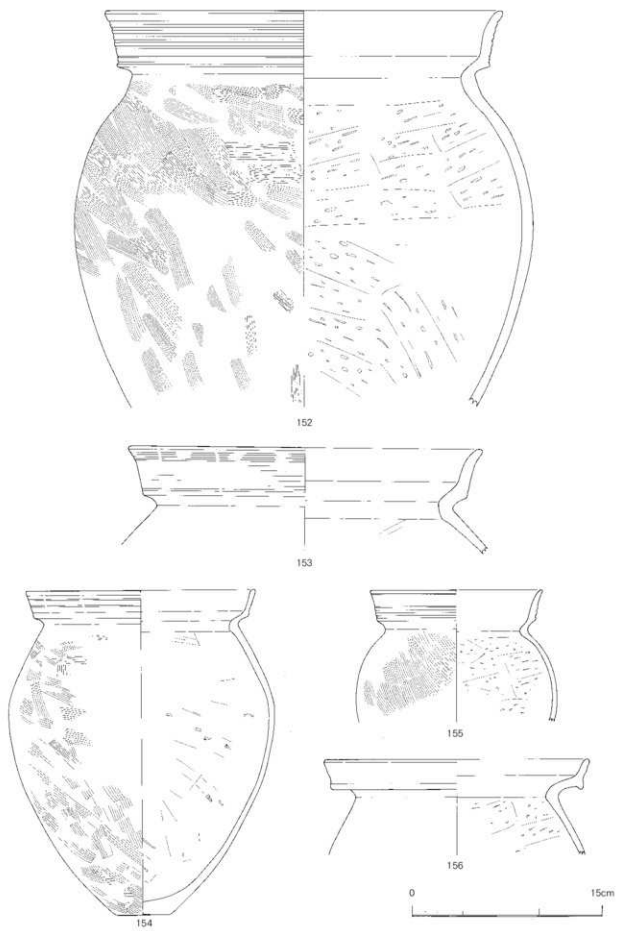
第14図 SD308 出土遺物 (S=1/3)



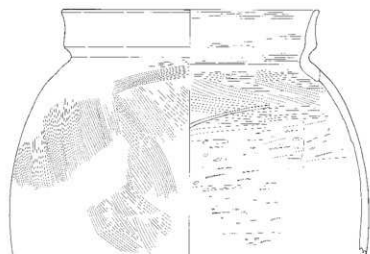
第15圖 SD308 出土遺物 (S=1/3)



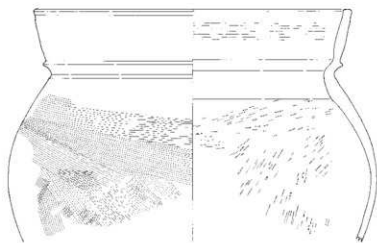
第16図 SD308・309・310・311・313・314・319・323・328・329 出土遺物 (S=1/3)



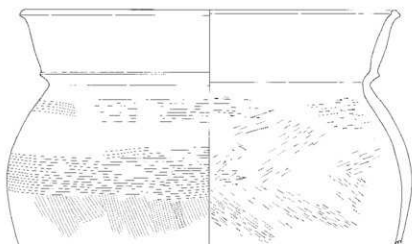
第17圖 SD317 出土遺物 (S= 1 / 3)



157



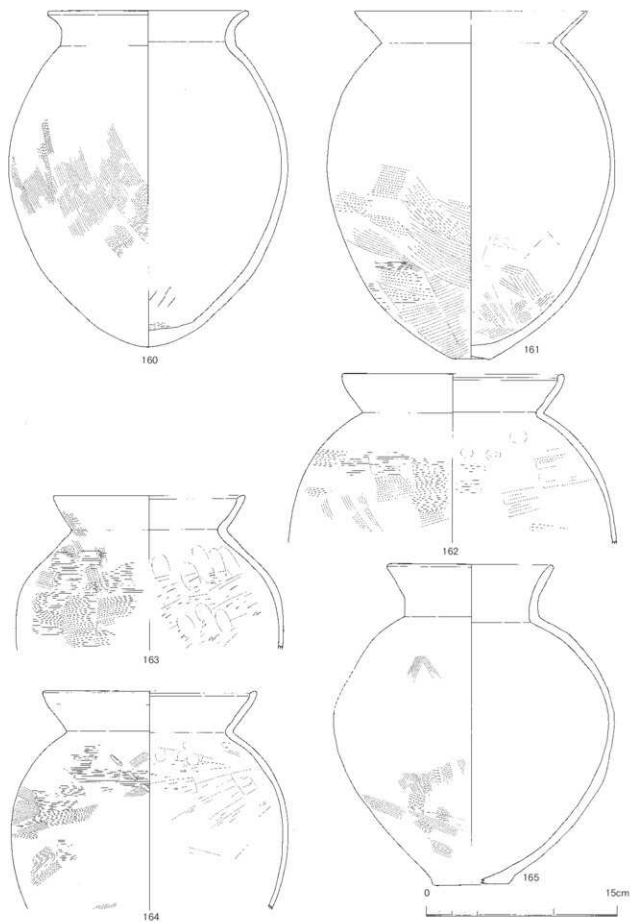
158



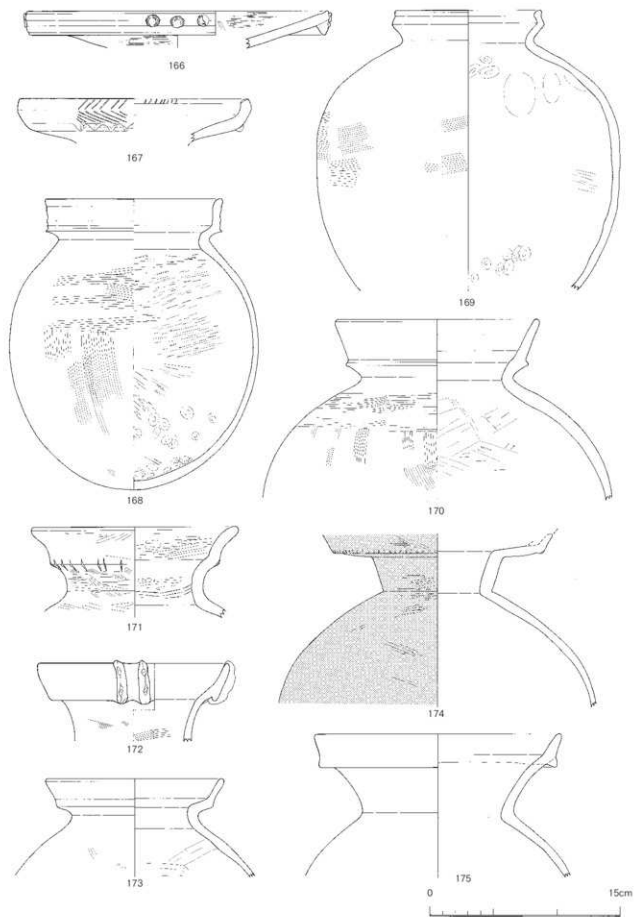
159



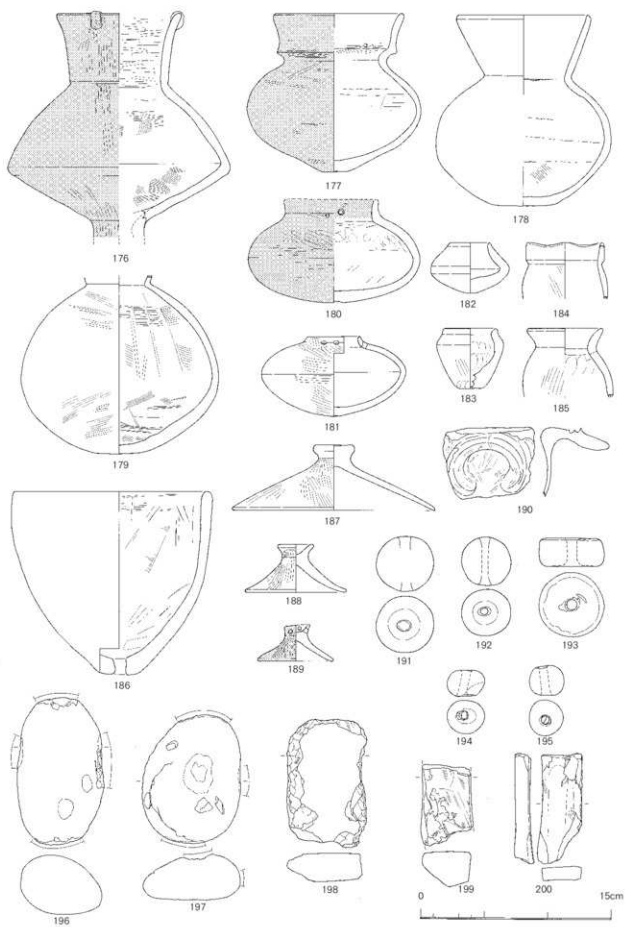
第18圖 SD317 出土遺物 (S= 1 / 3)



第19図 SD317 出土遺物 (S=1/3)

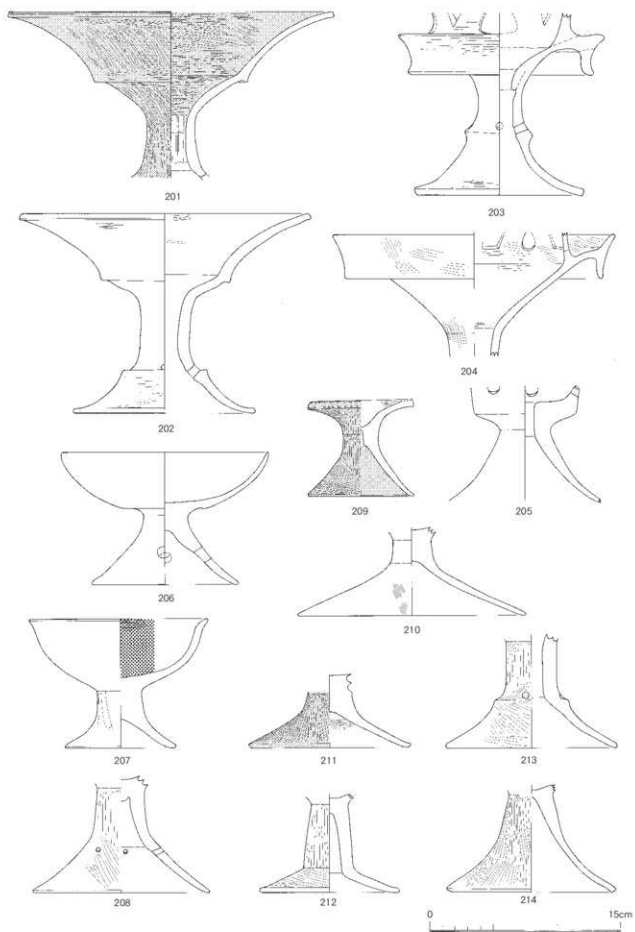


第20図 SD317 出土遺物 (S=1/3)

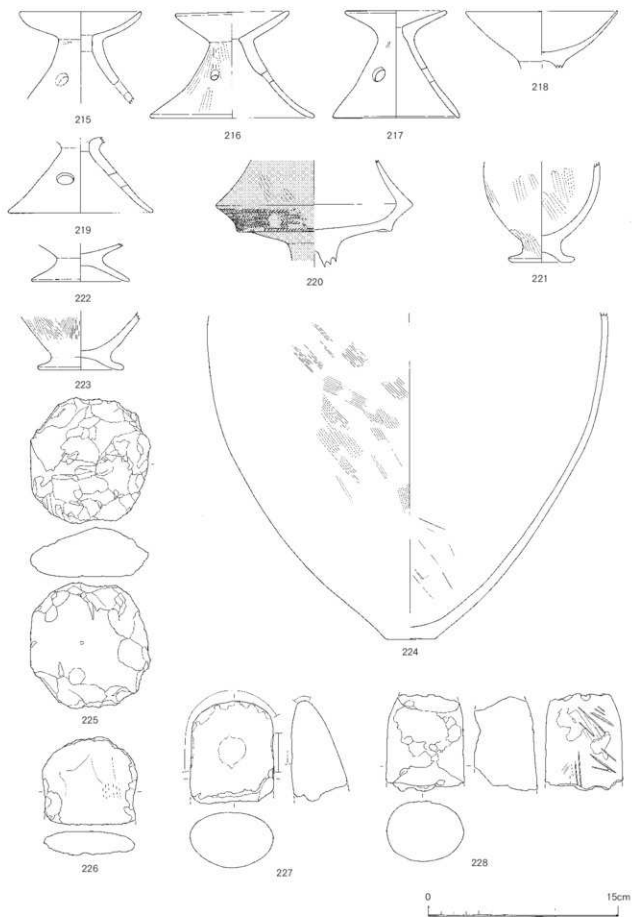


第21図 SD317 出土遺物 (S= 1 / 3)

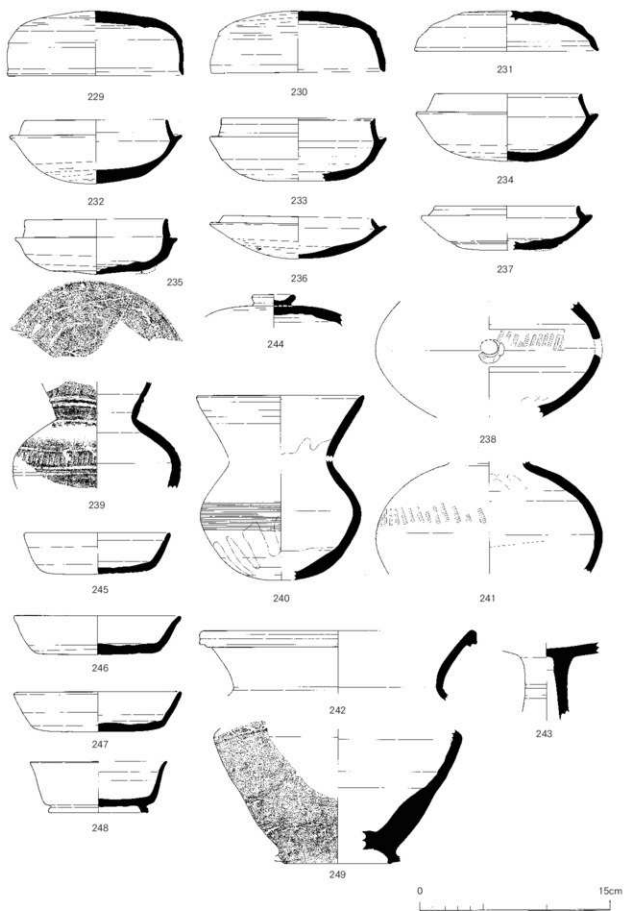




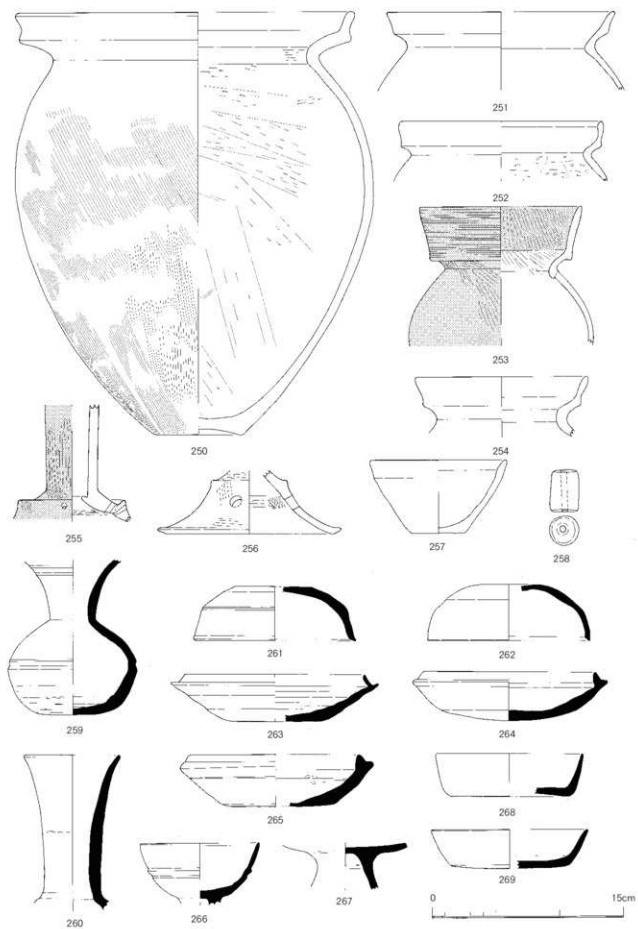
第22図 SD317 出土遺物 (S=1/3)



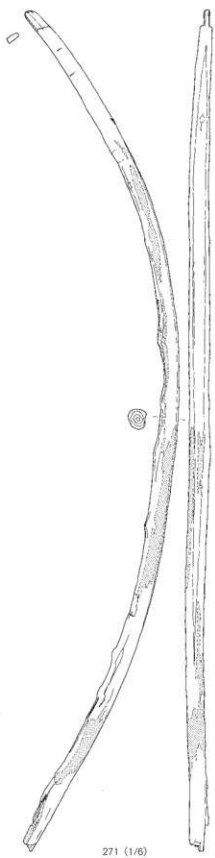
第23図 SD317 出土遺物 (S=1/3)



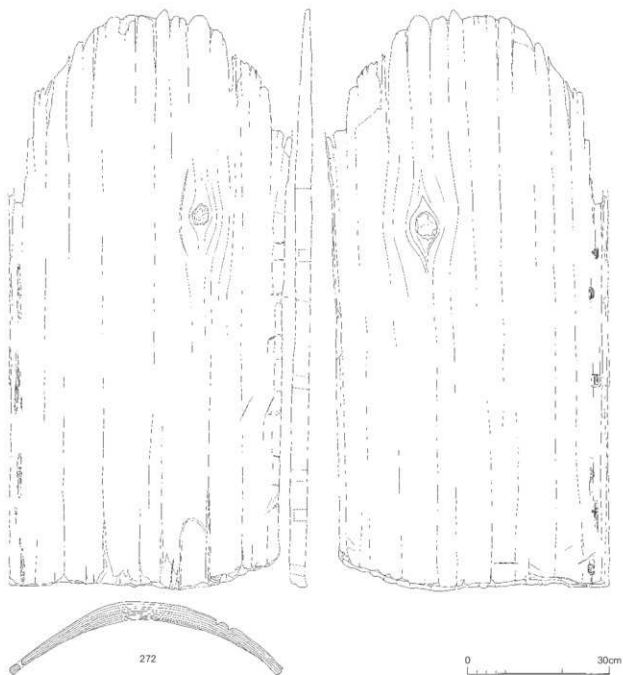
第24図 SD317 出土遺物 (S= 1 / 3)



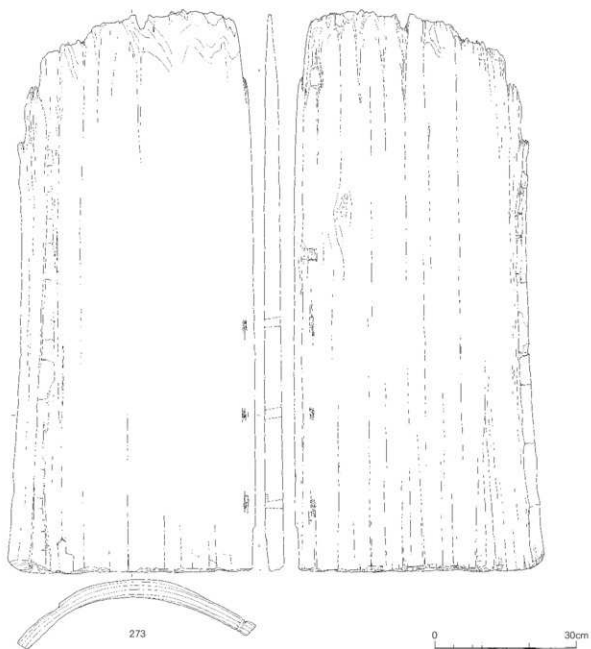
第25図 SD318・322 出土遺物 (S=1/3)



第26圖 SD317 出土遺物 (S = 1/3 · S = 1/6)



第27図 SE206 出土遺物 (S=1/6)



第28図 SE206 出土遺物〔S=1/6〕





国名	番号	調査区	道名	路線	法 量(m)			感 度			観 測			備 考	実測 番号		
					中心	線長	幅員	縦断	傾斜	断面	断面	断面	断面			断面	断面
11	56	西.2.2	兵庫県	兵庫県	176	1961		136	2	○	△	△	△	△	△	△	80111
	57	西.2.2	兵庫県	兵庫県	186	1961		204	2	○	△	△	△	△	△	△	80113
	58	西.2.2	兵庫県	兵庫県	178	1961											7003
	59	西.2.2	兵庫県	兵庫県	191	1961	112										7002
	60	西.2.2	兵庫県	兵庫県	226	1930		124	2	○	△	△	△	△	△	△	8003
12	61	西.2.2	兵庫県	兵庫県	146	1961		124	2	○	△	△	△	△	△	△	7025
	62	西.2.2	兵庫県	兵庫県	164	1911	234	130	2	○	△	△	△	△	△	△	6029
	63	西.2.2	兵庫県	兵庫県	129	1951	136	112	2								Q013
	64	西.2.2	兵庫県	兵庫県	156	1911		122	2	○	△	△	△	△	△	△	8025
	65	西.2.2	兵庫県	兵庫県	174	1921		142	3	○	△	△	△	△	△	△	8023
66	西.2.2	兵庫県	兵庫県	156	1731		129	11	○	△	△	△	△	△	△	△	Q014
	67	西.2.2	兵庫県	兵庫県	222	1711		174	2	○	△	△	△	△	△	△	Q012
	68	西.2.2	兵庫県	兵庫県	152	1990		124	4	○	△	△	△	△	△	△	Q017
	69	西.2.2	兵庫県	兵庫県	162	1931		140	3	○	△	△	△	△	△	△	1032
	70	西.2.2	兵庫県	兵庫県	2140	164		107	807	○	△	△	△	△	△	△	Q014
13	71	西.2.2	兵庫県	兵庫県	156	1730	232	136	5	○	△	△	△	△	△	△	8031
	72	西.2.2	兵庫県	兵庫県	175	1740		120	1	○	△	△	△	△	△	△	Q016
	73	西.2.2	兵庫県	兵庫県	164	1921		116	1	○	△	△	△	△	△	△	8033
	74	西.2.2	兵庫県	兵庫県	138	1921		102	1	○	△	△	△	△	△	△	7024
	75	西.2.2	兵庫県	兵庫県	1120	1120		121	189	○	△	△	△	△	△	△	8030
	76	西.2.2	兵庫県	兵庫県	1130	202		102	○	△	△	△	△	△	△	△	8034
	77	西.2.2	兵庫県	兵庫県	86	1861		1	○	△	△	△	△	△	△	△	7030
	78	西.2.2	兵庫県	兵庫県	106	80	26	80	7	○	△	△	△	△	△	△	8022
79	西.2.2	兵庫県	兵庫県	90	74	73	20	80	10	○	△	△	△	△	△	△	8030
	80	西.2.2	兵庫県	兵庫県	92	70	83	18	50	5	△	△	△	△	△	△	8026
	81	西.2.2	兵庫県	兵庫県	190	84	54	101	△	△	△	△	△	△	△	△	8021
	82	西.2.2	兵庫県	兵庫県	90	67	63	16	50	6	○	△	△	△	△	△	8029
	83	西.2.2	兵庫県	兵庫県	190	96	24	57	101	○	△	△	△	△	△	△	8022
	84	西.2.2	兵庫県	兵庫県	150	92	18	57	101	○	△	△	△	△	△	△	8023
	85	西.2.2	兵庫県	兵庫県	0143	120	25	112	101	○	△	△	△	△	△	△	8024
	86	西.2.2	兵庫県	兵庫県	60	42	34										Q009
87	西.2.2	兵庫県	兵庫県	60	53	51											Q005
	88	西.2.2	兵庫県	兵庫県	60	53	51										Q005
	89	西.2.2	兵庫県	兵庫県	60	53	51										7029
	90	西.2.2	兵庫県	兵庫県	60	53	51										7029
14	89	西.2.2	兵庫県	兵庫県	156	1960		20	10	○	△	△	△	△	△	△	8031
	90	西.2.2	兵庫県	兵庫県	162	1930		39	6	○	△	△	△	△	△	△	7021
	91	西.2.2	兵庫県	兵庫県	156	110		87	31	6	△	△	△	△	△	△	7023
	92	西.2.2	兵庫県	兵庫県	138	120	100	30	1	○	△	△	△	△	△	△	7025
	93	西.2.2	兵庫県	兵庫県	150	160		10	○	△	△	△	△	△	△	△	7015
	94	西.2.2	兵庫県	兵庫県	166	160		4	△	△	△	△	△	△	△	△	7017
	95	西.2.2	兵庫県	兵庫県	180	110	39	101	△	△	△	△	△	△	△	△	7018
	96	西.2.2	兵庫県	兵庫県	197	118	30	112	○	△	△	△	△	△	△	△	7016
	97	西.2.2	兵庫県	兵庫県	127	110	100	100	△	△	△	△	△	△	△	△	8019
	98	西.2.2	兵庫県	兵庫県	76	42	41										7027
99	西.2.2	兵庫県	兵庫県	58	37	33											7026
	100	西.2.2	兵庫県	兵庫県	40	16	9										7028
	101	西.2.2	兵庫県	兵庫県	176	1240	280	128	2	△	△	△	△	△	△	△	8010
	102	西.2.2	兵庫県	兵庫県	156	141		133	1	△	△	△	△	△	△	△	Q010
	103	西.2.2	兵庫県	兵庫県	140	140		84	△	△	△	△	△	△	△	△	8015
	104	西.2.2	兵庫県	兵庫県	176			104	△	△	△	△	△	△	△	△	8010
	105	西.2.2	兵庫県	兵庫県	124	45	62	2	△	△	△	△	△	△	△	△	8006
	106	西.2.2	兵庫県	兵庫県	140	140		4	△	△	△	△	△	△	△	△	8017
	107	西.2.2	兵庫県	兵庫県	140	140		2	○	△	△	△	△	△	△	△	7043
	108	西.2.2	兵庫県	兵庫県	138	4000		76	2	○	△	△	△	△	△	△	Q007
109	西.2.2	兵庫県	兵庫県	136	136		2	○	△	△	△	△	△	△	△	7034	

国名	番号	認定記	法名	法 量(m <sup>2</sup> )				延 床 積		延 床 積		延 床 積		延 床 積		備 考	実 務 年 次		
				延 床 積	延 床 積	延 床 積	延 床 積	延 床 積	延 床 積	延 床 積	延 床 積	延 床 積	延 床 積	延 床 積	延 床 積				
15	110	西.工.建	50008	建築業 住宅	114	1471	146	26	4	△	△	△	△	△	△	△	△	1021	
	111	西.工.建	50008	建築業 住宅	142	162	162	76	1	○	○	○	○	○	○	○	○	1040	
	112	西.工.建	50008	建築業 住宅	120	45	146	84	4	○	○	○	○	○	○	○	○	1039	
	113	西.工.建	50008	建築業 住宅	119	44	140	82	4	○	○	○	○	○	○	○	○	1037	
	114	西.工.建	50008	建築業 住宅	142	33	162	110	1	○	○	○	○	○	○	○	○	1038	
	115	西.工.建	50008	建築業 住宅	126	33	152	70	1	○	○	○	○	○	○	○	○	1036	
	116	西.工.建	50008	建築業 住宅	108	33	126	90	3	○	△	△	△	△	△	△	△	1035	
	117	西.工.建	50008	建築業 住宅	125	122	54												30分程度自治
	118	西.工.建	50008	建築業 住宅	135	176													1021
	119	西.工.建	50008	建築業 住宅	136	28	96	2											1021
	120	西.工.建	50008	建築業 住宅	120	37	70	2	△	△	△	△	△	△	△	△	△	1036	
	121	西.工.建	50008	建築業 住宅	146	40	102	5	○	△	△	△	△	△	△	△	△	1015	
	122	西.工.建	50008	建築業 住宅	152	40	100	83	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1014	
	123	西.工.建	50008	建築業 住宅	117	40	81	8	△	△	△	△	△	△	△	△	△	1018	
	124	西.工.建	50008	建築業 住宅	144	70	144	24	136	1	○	○	○	○	○	○	○	1016	
125	西.工.建	50008	建築業 住宅	140	160	169	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1012		
126	西.工.建	50008	建築業 住宅	86	210	228	6	△	△	△	△	△	△	△	△	△	1013		
127	西.工.建	50008	建築業 住宅	181	31	22	81	1	○	○	○	○	○	○	○	○	1011		
128	西.工.建	50008	建築業 住宅	78	170													1041	
16	131	西.工.建	50009	建築業 住宅	174	99	30	69	102	○	○	○	○	○	○	○	○	1010	
	132	西.工.建	50010	建築業 住宅	163	99	30	99	102	○	○	○	○	○	○	○	○	1009	
	133	西.工.建	50010	建築業 住宅	162	29	100	3										1007	
	134	西.工.建	50011	建築業 住宅	212	61													1012
	135	西.工.建	50011	建築業 住宅	136	140													1011
	136	西.工.建	50011	建築業 住宅	70	70	102	19	83	○	△	△	△	△	△	△	△	1008	
	137	西.工.建	50011	建築業 住宅	180	42	86	182	2	△	△	△	△	△	△	△	△	1006	
	138	西.工.建	50011	建築業 住宅	140	157	163	154	2	△	△	△	△	△	△	△	△	1004	
	140	西.工.建	50011	建築業 住宅	110	150													1013
	141	西.工.建	50013	建築業 住宅	122	100													1006
	142	西.工.建	50014	建築業 住宅	125	130													1009
	143	西.工.建	50014	建築業 住宅	88	150													1007
	144	西.工.建	50014	建築業 住宅	120														1008
	145	西.工.建	50014	建築業 住宅	120														1010
	146	西.工.建	50014	建築業 住宅	120														1005
148	西.工.建	50019	建築業 住宅	156	141													1003	
149	西.工.建	50023	建築業 住宅	140														1006	
150	西.工.建	50026	建築業 住宅	176	153													1008	
151	西.工.建	50029	建築業 住宅	36	34	28												1007	
17	162	西.工.建	50017	建築業 業	316	2103	364	272	10	○	○	○	○	○	○	○	○	1046	
	163	西.工.建	50017	建築業 業	260	180													1023
	154	西.工.建	50017	建築業 業	182	239	210	41	154	4	△	△	△	△	△	△	△	1021	
	155	西.工.建	50017	建築業 業	136	1190	158	112	4	○	△	△	△	△	△	△	△	1013	
	156	西.工.建	50017	建築業 業	208	170													1012
	157	西.工.建	50017	建築業 業	204	1190	284	186	9	○	△	△	△	△	△	△	△	1014	
	158	西.工.建	50017	建築業 業	246	1946	262	224	11	○	○	○	○	○	○	○	○	1048	
	159	西.工.建	50017	建築業 業	204	1190	282	250	7	○	○	○	○	○	○	○	○	1041	
	160	西.工.建	50017	建築業 業	156	239	220	136	3	○	○	○	○	○	○	○	○	1040	
	161	西.工.建	50017	建築業 業	146	256	226	28	142	102	○	△	△	△	△	△	△	1011	
162	西.工.建	50017	建築業 業	174	1134													1048	
163	西.工.建	50017	建築業 業	152	1323	212	124	4	○	△	△	△	△	△	△	△	1044		
164	西.工.建	50017	建築業 業	177	1173	220	132	3	△	△	△	△	△	△	△	△	1019		
165	西.工.建	50017	建築業 業	120	226	223	60	107	3	○	○	○	○	○	○	○	1016		
166	西.工.建	50017	建築業 業	226	1230													1015	





第3表 石器觀察表

國號	番号	遺構	器 種	寸 量			材質	色 澤	形 式・装飾等			備 考	実証番号		
				幅	長さ	最大厚			厚 度	輪 郭	装 飾				
9	12	SK208	磨製石斧	118.0	52.0	28.0	272.000	灰色	1段ノ 反凸色	研削	研削		特製文・特製編打痕	T012	
9	16	SK317	磨石	15.0	7.0	0.70		褐色黒褐色	100%ナ 磨削凸色				磨石遺石	T007	
16	329	SD208	石鏃	58.0	115.0	52.0	440.000	中粒砂岩	反凸凸 反凸色					SK234	
16	330	SD208	磨石	78.0	150.0	20.0	405.000	凝灰岩	2段ノ凸 反凸色	削打痕	削打痕		磨石遺石	SK333	
16	337	SD311	磨石	160.0	81.0	38.0	435.000	凝灰岩	1段ノ 反凸色	削打痕	削打痕			SK14	
16	347	SD314	磨石	89.0	102.0	31.0	370.000	凝灰砂岩	1段ノ凸 反凸色	削打痕	削打痕			SK64	
21	386	SD317	磨石	117	69	47	440.000	凝灰岩	2段ノ凸 反凸色	削打痕	削打痕			Q049	
21	397	SD317	磨石	103.0	74.0	38.0	375.000	凝灰岩	2段ノ凸 反凸色	削打痕	削打痕		特製C、J下巻化	Q048	
21	398	SD317	打製石斧	102.0	63.0	23.0	225.000	凝灰岩	1段ノ 反凸色				特製文類	Q047	
21	399	SD317	磨石	85.0	42.0	28.0	83.000	凝灰砂岩	1段ノ 反凸色			4葉研削	凸凹状	Q044	
21	390	SD317	磨石	88.0	35.0	15.0	50.000	頁岩	2段ノ凸 反凸色	研削		4葉研削	凸凹状	Q043	
23	225	SD317	磨製石 木皮孔	100.0	95.0	39.0	390.000	磨石凝灰岩	1段ノ凸 反凸色	成形痕	成形痕		4葉研削	磨石石木皮孔	Q050
23	226	SD317	打製石斧	70.0	75.0	19.0	120.000	凝灰岩	2段ノ凸 反凸色				特製文類	Q046	
23	227	SD317	磨製石斧	82.0	66.0	44.0	310.000	中粒砂岩	1段ノ 反凸色	研削			特製文類・1葉研削	Q045	
23	228	SD317	磨石	77.0	62.0	49.0	280.000	凝灰岩	2段ノ凸 反凸色	削打痕			磨石遺石木皮孔	Q051	

第4表 木製品觀察表

國號	番号	遺構	器 種		寸 量		材 質	色 澤	備 考	実証番号		
			材質	用途	長	幅						
20	270	SE202	木鏃	柄杓	425	17	18	正葉榎	杓	芯材丸木・	T500	
20	271	SE202	木鏃	柄杓	1440	31	33	正葉榎	杓	芯材丸木・	SK500	
27	272	SE206	木鏃	柄杓	1217	645	40	多葉榎	洗戸杓	磨石上巻・	木紅丸	SK300
28	273	SE206	木鏃	柄杓	1180	527	40	多葉榎	洗戸杓	磨石上巻・	木紅丸	SK300

## 第4章 自然化学分析

### 木曳野遺跡群から出土した木製品の樹種

株式会社 東都文化財保存研究所

#### 1. 資料

資料は出土した井戸杵1点(第27図272)、弓2点(第26図270・271)の合計3点である。

#### 2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の複合液)で封入し、プレパラートを作成する。作成したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

#### 3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は全て針葉樹材で、2種類(スギ・カヤ)に同定された。各種類の解剖学的特徴を記す。

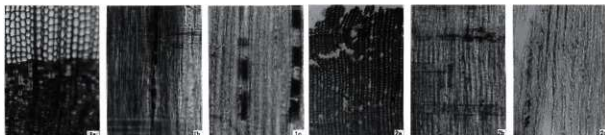
・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、壁孔は比較的大きく、丸口の長軸方向が水平になるものが多い。1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・カヤ(*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道・樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には、2本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型〜ヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

本地域では、現在カヤの変種であるチャボガヤが生育しているが、カヤは植栽以外に生育していないとされる。カヤが高木になるのに対し、チャボガヤは低木であるが、木材組織は類似しており、組織の特徴からカヤとチャボガヤを分類することは困難である。したがって、本報告のカヤも、変種のチャボガヤの可能性がある。



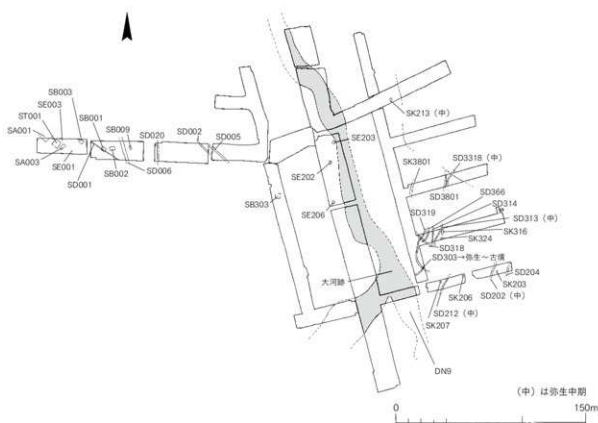
## 第5章 総括

### 第1節 畝田・寺中遺跡の時期別の様相について

調査では合計4か年にわたり13,760㎡に及ぶ調査を実施した。寺中B遺跡と畝田・寺中遺跡の2遺跡について述べることにし、各時代の遺跡の内容について記す。

#### 縄文時代

今回の調査では縄文時代の遺構は確認されていない。出土遺物として、主幹線1区の大川跡より縄文時代晩期の浅鉢が出土している。石川県が調査を行った地点では土坑及び縄文土器の出土が確認されている。畝田・寺中遺跡中に縄文時代の遺跡が存在することは疑いないが、集落の規模や存続年代等に言及できる資料ではない。浅鉢は晩期中頃の玉拍三叉文をもつもので、中屋サワ式期が比定される。このほか、右斜状条痕文を施す大型の深鉢も出土しており、縄文時代の遺跡が展開していたものと考えられる。大川跡は縄文時代晩期には既に開口していたといえよう。



第29図 弥生時代遺構配置図 [S = 1/2,000]

#### 弥生時代(中期)

弥生時代は中期と後期終末期の2時期について顕著にみる事ができる。弥生時代中期は畝田・寺中遺跡でみられ、後期終末期は寺中B遺跡に集約される。

畝田・寺中遺跡における弥生中期の溝は県費分1区のSD202・204・212、東工区東西線1区でSD313、314、316、317、318、319、東工区東西線2区でSD3318、SD3801などがある。このうち、SD204は

石川県調査地点でのV1区SD12に接続することが確認でき、SD202・212も調査区中に延伸とみられる落ち込みを見ることが出来る。溝の規模はいずれも幅が狭くまた浅いため小規模な印象を受ける。これらの溝からは小松市の八日市地方遺跡を初見とする小松式期に属する壘・甕類がみられる。集落を囲む周溝、或いは近傍に設けた区画溝と考えられるが、建物跡等は確認していない。遺構配置を検討するとSD313は東西線2区のSD3318と同一の溝であることがうかがわれる。小規模且つ浅いものではあるが、南西から北東方向に向け展開していたことであろう。これら溝群の共通する特徴として南西方向から北東方向に伸びていることが挙げられる。土坑では泉費分A区SK203、B区SK206・SK207、東西線1区SK316、主幹線4区支線SK213などがある。SK206は小松式期の古相を示し、SK318やSK213は新相にあたる。集落域では、泉報告にある北東群に属する遺構であろう。泉費分C区南より主幹線南北線1区の大川跡は泉調査のDN9の延伸部に当たり、C区西の大川跡へ至る落ち込みはDN9の右岸とみられる。泉調査のDN8、DN5・6・8は南北に流れる大きな河川跡で大川跡と同一の河川跡であろう。前述の中期の溝群は河川跡より東に位置するもので泉報告の北支群は主幹線4区に至る南北域に展開していたものと推測される。石川県の調査地点ではDN8、DN5・6・8の東に南東群があることから当時の集落は南北方向に長く展開することが考えられる。集落域が南北方向に展開した最大の要因は大川跡がある。縄文晩期に既に開口していた大川跡は弥生中期でも地形の阻害要因たりえるもので、弥生中期の集落はこの川に沿うよう展開し、集落の東に溝を施すことで、集落の境界域としたものであろう。

#### 弥生時代(終末期)

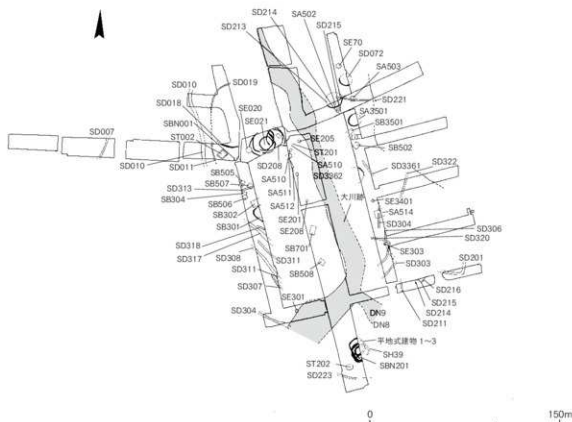
弥生時代の終末期から古墳時代前半に至る時期については、いわゆる月影式土器に代表される有段掘凹線甕が盛行する段階を終末期から古墳時代初頭と位置づけ、古墳時代前半期を布留式に代表されるく字甕及び山陰系の有段部に凸帯を巡らせる甕・壘類の出現を区分の目安とした。また、初期須恵器の出現以降をもって古墳時代中期とする。寺中B遺跡1区より4区までで確認した遺構のほとんどは弥生時代終末期の遺構であった。遺構の錯綜が少なく、また出土した土器も他時期の土器の混ざりがなく、寺中B遺跡の東端部に相当するもので、5区より東と明確に区分できる。竪穴系建物跡では1区ST001、掘立柱建物は1区でSA003、SB003、2区SB001、SB002、SB009がある。磁北より西に50°から30°の範囲に軸を振る建物が多く、基本1間×2間～3間の側柱建物で当遺跡における弥生時代終末の建物の基準といえよう。溝では、2区SD001、SD006、3区SD002、SD020、4区SD005があり、いずれも南東から北西にかけ展開し、建物、溝とも東に向かうにつれ数が減少している。

畷田・寺中遺跡では泉費分A区SD204、東西線1区でSD305・SD315・SD317、SK316・SK324などがある。弥生中期の溝と交錯や並走するため、終末期の集落もまた、中期と同じような展開を呈するものとみられる。井戸跡としては1区よりSE001、SE003、主幹線3区よりSE202・SE203・SE206の5基がある。井戸枠に継ぎ接ぎの木材を用いるものが多く、底板を有する複雑な構造のものもある。井戸枠より依存度の良い土器を検出したものは井戸祭祀に関するものであろう。主幹線で検出したSE202、SE203、SE206はいずれも大川跡などの南北に流れる流路に接する地点に位置し、この周辺では溝や土坑など当該時期の遺構はほかに見当たらない。

#### 古墳時代

畷田・寺中遺跡のうち、最も遺跡の規模が拡大した時期は古墳時代前期から中期に至る段階である。東西では東工区から西工区に至る範囲、南北では主幹線1区より主幹線5区に至るほぼ全域で当該時





第30図 古墳時代遺構配置図 [S=1/2,000]

期の遺構を確認している。円形に巡る周溝を有する建物跡の分布をみると寺中B遺跡5区で平地式建物1～6、主幹線1区で平地式建物1・SD235、同2・SD227・SD237、同3SD236、西工区から3度の建て替えを有するSB301などがある。平地式建物1・SD235は県調査における弥生の周溝建物の可能性について言及されたSD10と古墳時代の周溝建物の一部と解されるSH39が重複のみられる溝の延伸部分に当たる。この周辺において弥生時代中期から後期に属する遺物の出土はみられないことから、古墳時代の建物と判断できよう。いずれも同一地点で3回から最大5回に及ぶ建て替えを確認できる。また東工区南北線3区から4区にまたがる範囲でSD213やSD350も平地式建物の周溝と考えられる。また、方形に区画を呈する溝では4区ST002、県費分1区SD201、東西線1区SD320などがある。ST002は小型の竪穴系建物の周溝域を示すもので、周溝を持たず、平面が円形を呈するものとして主幹線1区ST202も竪穴系建物の可能性がある。

溝では集落を囲む周溝と、建物や土坑など当時の生活域に必要な区画溝などが確認されている。周溝のうち、4区SD310、SD311と4～2区SD310、SD019は古墳時代前期の集落を囲む溝の北西域を示すもので、この溝より西及び北方向で建物跡や土坑などは確認せず、SD010より西に離れた地点の1区SD007が最も外郭域となる。西工区SD304、SD317及びSD308の3条は前述の溝3条と対応するものとみられ、SD007からSD010の区間およびSD304からSD308の区間の遺構密度は比較的空虚な様相を呈し、SD308及びSD310より東の遺構密度と明らかに異なるため、当該時期の集落の展開域はこれら3条の溝より東に中心を置くことがわかる。主幹線1区から5区までの南北軸を中心に建物跡は東西に広く広範囲にわたり展開するが、東側に展開するものは県調査における北群、西のもの

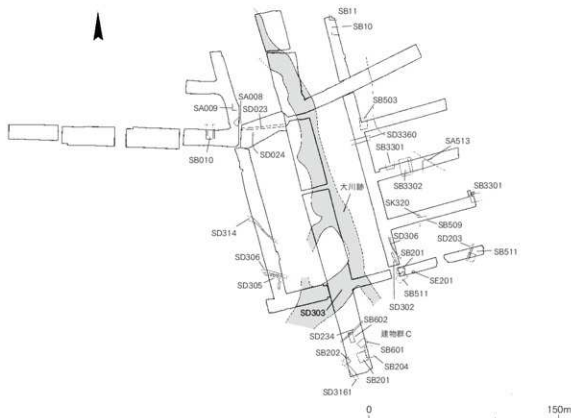
は北西群の延伸域に当たると見られよう。

井戸では、寺中B遺跡5区にSE020、東工区南北線4区で直径が4 mを超える大型の土坑について井戸とした。布留式期の土師器甕、壺を中心とした遺物が出土し、初期須恵器は見られないため、古墳時代前期の段階のものとみられる。平地式建物1～6と切りあい横断する溝SD208と接続するものであれば、平地式建物1～6は一段階古い弥生終末から古墳初頭の時期である可能性を残す。県調査区ではこの規模を有する井戸は確認されておらず、確認については類例の増加を待ちたい。主幹線3区にSE201・SE205・SE208の3基は一段階前の弥生終末期のSE202、SE203、SE206と隣接しており、異なる時期の井戸がほぼ同じ位置に設けられた状況は、集落の構成内容が弥生時代終末期と古墳時代初頭ではほぼ同質であったことを裏付けるものではないだろうか。

大川跡は西工区及び主幹線1区で開溝する地点より北東へ向け、弥生時代と同様の流路を有する。県調査地点よりDN 8・DN 9が合流する。主幹線2区及び3区では東壁で大川跡の落ち込みを確認するもので、弥生時代の河川幅よりやや狭くなったものとみられる。主幹線5区を通じ、北西方向へ向かうもので、桂・寺中遺跡で確認した大川跡は大きく蛇行した同一の河川跡とみられる。出土遺物では弥生時代終末期から古墳時代前期及び中期に位置する初期須恵器と時期幅を有し、古墳時代前期が圧倒的多数を占める。溝以外で初期須恵器を伴う遺構は西区SE301のみである。

#### 古代

古代の遺構は主に大川跡より東に位置する。建物跡では隅丸方形の掘方を持つ柱穴を配する側柱建物跡と庇を有する建物跡について確認している。東西線2区のSB3302は南北に軸を有する東に庇を有する片面庇建物跡で規模の大きな建物跡である。このほか主幹線1区でSB201・SB202・SB204・



第31図 古代遺構配置図 (S = 1/2,000)

SB512、東西線1区の東端でSB3301、同じく中程でSB509、東西線3区と南北線3区の交点付近でSB503南北線4区の北端でSB10、SB11と南北に軸を有する建物跡がみられる。SB3301を除くとは南北に同じ軸線上に配置されている。寺中B遺跡4区では建物の東西に庇を有する両面庇建物跡であるSB010を確認しているが、その他には建物跡は確認されていない。東西線の東には大徳川の旧河道とみられる落ち込みがあるため、遺跡の広がりを推し量ることは無理があるが、県調査地点での概況では主幹線1区より南へ離れた建物が密集する地点を建物群Bとし、これより北を建物群Aと区分している。建物群Aについては河跡に沿うように1列正倉型建物跡と南北軸の総柱建物跡が列をなしていることが看取される。河跡の西では建物群Cとした大型の建物跡が河跡に隣接しており、河跡の両岸で河跡に沿って配置されている。市の調査で確認されたSB11・SB10・SB503・SB3301、及び庇付き建物SB3302は建物群Aを構成する一群に含まれるものであろう。県調査地点での建物跡及び既出の遺物等から当遺跡の性格については古代の郡津波関連の遺跡との指摘がなされており、市で行った調査地点はこの範囲を更に北へ延伸させる結果を導いたと言えよう。

溝・河跡では県調査のDN8が県費分C区に延伸し、主幹線と東西線の間を流下するものとみられ、主幹線2区よりSD240が合流し、主幹線4区及び5区へと延伸する。区画溝と解されるものでは、寺中B遺跡5区SD024、西工区SD306・SD314、東西線3区SD3360などが当該時期の溝跡である。SD3360は掘方・規模共に大きく、河川跡に接続していた大きな区画溝であろうか。西工区SD305・SD306は当該時期の小規模な区画溝とみられる。SD222は後述で中世の区画溝としているが、当該時期の須恵器が出土していることからSD222の開口時期はこの段階にさかのぼる可能性がある。

土坑では、東西線1区SK320が当該時期の地鎮関連遺構とみられる。有台及び底部系切りを施す土師器・土師器・土師器が中心で11世紀前半に位置するものとみられ、古代から中世への過渡期段階のものである。この土坑に隣接するSB509をこの土坑と関連付けると、大川跡に接して連なる建物群とは時期が異なる南北に連なる一群の建物の時期を裏付けるものではないか。

大川跡はこの段階で河川跡は機能していたとみられるが、主幹線1区大川跡及びSD240では河川堆積土砂の上位に須恵器類が集中して出土しており、下位から出土する古墳時代以前の遺物の堆積箇所と大きな隔りがあるため、大川跡はほぼ埋没し、浅い落ち込み状になっていたようである。また、SD240は主幹線2区の西壁より出現し合流するもので、大川跡の流路に見られる遺物とは性格が異なることが想定される。墨書を施す須恵器は1区大川跡上層及びSD240でほぼ占められ、この須恵器の年代では8世紀末より10世紀前半の高松窯、末窯より供給される坏身・坏蓋類が大半を占め、土師器・土師器の比率は少ない傾向がある。主幹線2区のSD240と地点周辺で河川への投棄が行われたと解釈したい。

## 中世

中世の遺構は大きく二つに分かれる。寺中B遺跡3区より4区・4-2区にわたり確認された建物跡ではSB004・SB005・SA006・SA007・SB006・SB007・SB008・SB012がある。SB004及びSB006・SB007は総柱建物跡で検出部位が5間×5間を測る規模の大きなもので、うち、SB006とSB007は建て替えによるものとみられる。柱穴の掘方は小さくかつ柱材の輪郭に近い円形を呈するものとなり、小型のものは磁北より0°~15°東へ、大型のものはこれより90°西へ軸を振る傾向がある。主幹線4区ではSA501・SA506・SA504が建物の一部ではあるが、柱列を確認している。SB004、SB006、SA504など東西方向に軸を有するものを主屋とみなせば、南北方向に軸を持つ小型の建物がこれに付属するものであろうか。後述する群2区に位置する一群とは異なるものとして中世北群とする。

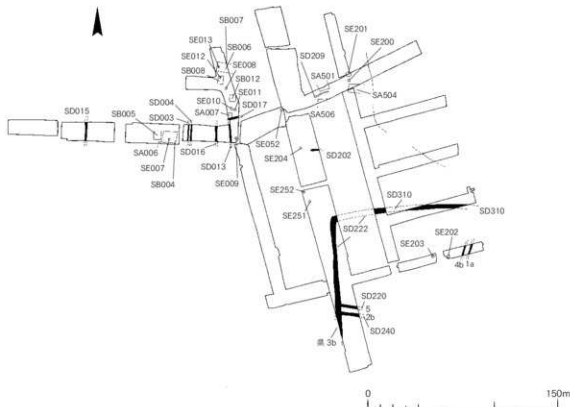
主幹線1区より2区にかけて南北に配するSD222は県調査の3bの延伸にあたる。2区で90°東に

曲がり南北線2区及び東西線1区でSD310と報告した溝は、県報告で大きく囲まれる範囲を形成する堀の一部で、時期は12世紀後半から14世紀と時期幅がある。3b及びSD222の南北長さは約220mに及び、3aは170mであることから南北に長い方形の区画を看取できる。県調査の4bと1aは南北に縦貫する溝でこの2条の溝の間を道と解することができるもので、県費分A区SD202とSD203はこの延伸である。また、主幹線1区のSD240とSD220は県調査区において4bと1aとはほぼ直角に交差する5と2bに該当しSD229も県調査のbの延伸である。これら3条はSD222に接続するもので、堀で囲まれた範囲の中の区画を構成するものであろう。このほか、堀の区画内に位置する遺構では県費分A区でSE202、B区でSE203を確認している。

中世北群と堀で囲まれた範囲の間では素掘りの円筒形を呈する土坑のうち井戸としたSE251・SE252・SE204と溝でSD202などがある。建物跡などは確認されておらず、調査範囲をみる限りでは空地地の様相を呈す。SD202及びSD222の形成をみると、大川跡に切りあい、直線的に軸を持つため、大川跡に接続することは考え難く、大川跡の埋没後、あるいは平坦化した後に溝が設けられたと解釈できよう。大川跡は奈良・平安時代で浅い落ち込みとなり、中世段階ではほぼ消滅している。空地地であることは大川跡の消滅後、平地化したとはいえ湿潤な土壌を呈すため、集落等を展開する条件に見合わず、耕作地或いは荒蕪地であったものか。

#### 参考文献

- 石川県教育委員会 2006 「金沢市畷田西遺跡群Ⅲ」  
 石川県教育委員会 2006 「金沢市畷田西遺跡群Ⅳ」  
 石川県教育委員会 2006 「金沢市畷田西遺跡群Ⅴ」  
 向井裕知 2010 「中世加賀の町場と区画」『都市を切る』山川出版社



第32図 中世遺構配置図 [S = 1/2,000]



西区远景



SE301



SK301



SK304 - 305 - 306



SK308



SK320



SB301



SB303



SD301



SD302



SD307



SD308



SD314



SD317



SD318



SD318遺物出土状況



SE301 (1・2・3)



SK308 (9・10) SK315 (13)  
SK15 (14・15) SK320 (17・18・19・20)



SD302 (24・25・26・27・28・29)



SD302 (30・31・33・34・35・36・37)



SD308 (89・90・93・95・96)



SD308 (60・61・62・63・66・67・68・69)



SD308 (78・79・80・82・83・85)



SD317 (157)



SD317 (159)



SD317 (152)



SD317 (180 · 181)



SD317 (160 · 161 · 162 · 164)



SD317 (205 · 206 · 207 · 208 · 209 · 211 · 212 · 216 · 217 · 219 · 220 · 222)





SD317 (176・178・179)



SD317 (202・203)



SD317 (182・183・185・187・188・189・190・191・192・193・194・195)



SD318 (250)



SD322 (259・260・261・262・263・264・265・266・  
267・268・269)



SD302 (40 · 41 · 42 · 43)



SD308 (105 · 106 · 109 · 110 · 112 · 113 · 114 · 115)



SD310 (132)



SD317 (229 · 230 · 231 · 232 · 234 · 236 · 238)



SD308 (112 · 117 · 118 · 119 · 120 · 121 · 124)



SD308 (126)



SD317 (196 · 197 · 198 · 199 · 200 · 225 · 226 · 227 · 228)



SD302 (270 · 271)

## 報告書抄録

ふりがな	いしかわけん かなざわし うわだ・じちゅういせき							
書名	石川県 金沢市 畷田・寺中遺跡							
副書名	一本埴野遺跡群一							
巻次	Ⅺ							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	322							
編集者氏名	谷口宗治							
編集機関	金沢市埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-0374 金沢市上安原南60番地 Ⅱ (076) 269-2451							
発行年月日	平成31(2019)年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
畷田・寺中	石川県 金沢市 一本埴野 寺中町、 畷田西4丁目	172014	県01499 市029	36° 36° 33°	136° 42° 33°	20020715～ 20020920 20030602～ 20031128 20040502～ 20041029	約13,760㎡	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
畷田・寺中 遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・ 奈良・平安・鎌倉・ 室町		竪立柱建物跡7棟 溝跡22条 井戸/土坑跡9基		土師器 須恵器 陶磁器 木製品 石製品		
要約	平成16年度に調査した東西の区画道路のうち、西側の調査区について報告。竪立柱建物跡、平地式建物跡、井戸跡、溝跡等を検出した。SD308およびFS317は弥生後期から古墳時代初頭の土器が定量的出土する環境と考えられる。SB301は平地式建物で建て替えを確認でき、14年度調査で確認した建物跡を含め集落域を形成するうちの南限を示すものとみられる。							

石川県 金沢市  
**畷田・寺中遺跡Ⅺ**  
— 一本埴野遺跡群Ⅺ —

「金沢市文化財紀要」322  
平成31年3月28日発行

発行 金沢市  
編集 金沢市埋蔵文化財センター  
〒920-0374 石川県金沢市上安原南60番地  
TEL (076)269-2451 FAX (076)269-2452  
印刷 有限会社 オフィス山崎  
〒920-0373 金沢市みどり1丁目48番地  
TEL (076)259-1126

